

# 公 家 町 遺 跡

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 公 家 町 遺 跡

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、倉庫建設工事に伴う公家町遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

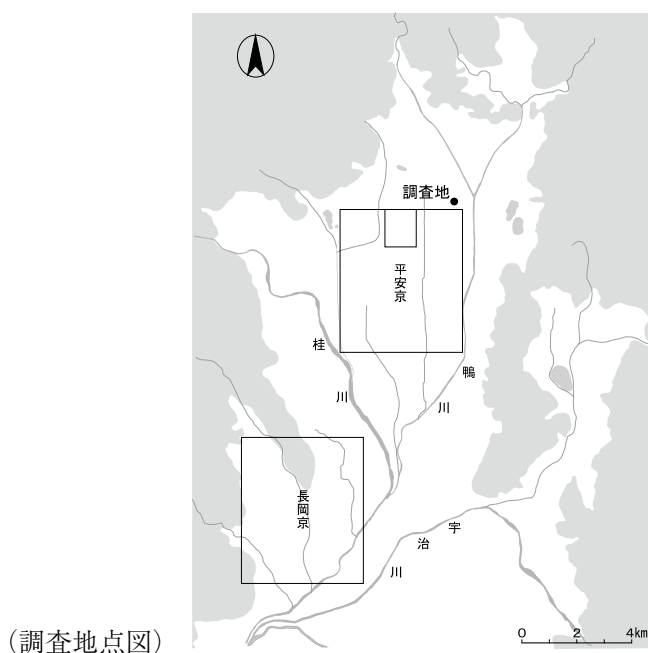
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成27年12月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- |          |   |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名  | 公家町遺跡（文化財保護課番号 11 H 193）                      |
| 2 調査所在地  | 京都市上京区京都御苑3番                                  |
| 3 委 託 者  | 株式会社 大亀工務店 代表取締役 山本勝廣                         |
| 4 調査期間   | 2015年7月1日～2015年8月28日                          |
| 5 調査面積   | 約257㎡   |
| 6 調査担当者  | 布川豊治・伊藤 潔                                     |
| 7 使用地図   | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「相国寺」・「御所」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系  | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）                |
| 9 使用標高   | T.P.：東京湾平均海面高度                                |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。             |
| 11 遺構番号  | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。                          |
| 12 遺物番号  | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。                           |
| 13 本書作成  | 布川豊治  |
| 14 備 考   | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員および資料業務職員があたった。    |



(調査地点図)

# 目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	5
(1) 層序	5
(2) 遺構の概要	5
(3) 第1面	5
(4) 第2面	6
(5) 第3面	17
(6) 第4面	18
4. 遺 物	19
(1) 遺物の概要	19
(2) 土器類	19
(3) 瓦類	23
(4) 土製品	23
(5) 銭貨	24
(6) 金属製品	24
5. ま と め	27

# 図 版 目 次

図版1	遺構	第1面遺構平面図 (1:150)
図版2	遺構	第2面遺構平面図 (1:150)
図版3	遺構	第3面遺構平面図 (1:150)
図版4	遺構	第4面遺構平面図 (1:150)
図版5	遺構	調査区西壁断面図 (1:50)
図版6	遺構	石組溝177実測図 (1:50)

- 図版7 遺構 溝180実測図（1：50）
- 図版8 遺構 石組溝272・土坑266・石組遺構267・溝277実測図（1：50）
- 図版9 遺構 1 第1面全景（北から）  
2 第2面全景（北東から）
- 図版10 遺構 1 建物1・2（北東から）  
2 建物4・溝180（北から）
- 図版11 遺構 1 塀6・建物9～11（北から）  
2 門8・溝180西部・路面（北から）
- 図版12 遺構 1 溝180（西から）  
2 溝180下層（西から）  
3 石組溝177（西から）  
4 カマド37（東から）
- 図版13 遺構 1 第3面全景（北東から）  
2 石組溝267（東から）  
3 石組溝272（東から）
- 図版14 遺構 1 第4面全景（北から）  
2 石組溝298下層（東から）  
3 溝293・294（北東から）  
4 調査区南部、土坑279（東から）
- 図版15 遺物 土器類
- 図版16 遺物 瓦類・土製品・銭貨・金属製品

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前全景（北から）	2
図4	作業風景（南から）	2
図5	周辺調査位置図（1：5,000）	3
図6	調査区北壁断面図（1：50）	6
図7	建物1・2実測図（1：50）	7
図8	塀3実測図（1：50）	8
図9	建物4・塀5実測図（1：50）	8



図10	塀6・7実測図（1：50）	10
図11	門8実測図（1：50）	11
図12	建物10実測図（1：50）	11
図13	建物11・土坑193実測図（1：50）	12
図14	建物9実測図（1：50）	13
図15	路面・柱列12実測図（1：80）	14
図16	カマド37、土坑82、土器溜93・215実測図（1：50）	16
図17	第3・4面出土土器実測図（1：4）	19
図18	第2面出土土器実測図（1：4）	21
図19	瓦拓影・実測図（1：4）	22
図20	土製品拓影・実測図（1：2）	23
図21	銭貨拓影（1：1）	24
図22	金属製品実測図（1：2）	24
図23	造営絵図	28

## 表 目 次

表1	周辺調査文献一覧表	4
表2	遺構概要表	5
表3	遺物概要表	19
表4	土器一覧表	25
表5	銭貨一覧表	26
表6	金属製品一覧表	26



# 公家町遺跡

## 1. 調査経過

### (1) 調査に至る経緯

調査地は京都御苑の中心である京都御所の北西部、皇后門南東脇に位置する。当地に倉庫棟の建設が計画された。このため京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）により発掘調査の指導がなされ、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当した。

### (2) 調査の経過

調査区は文化財保護課の指導の下、計画建物範囲に設定した。調査面積は257㎡である。また、今回の調査では、新築工事で破壊を免れない設計GL±0から-55cm（標高51.935m）までを対象とした。

調査は平成27年7月1日より開始した。器材搬入の後、現代盛土は重機掘削により除去し、掘削土は調査区外に搬出・仮置きした。現代盛土の下面で遺構面を確認し、以下掘削下限深度までの間に4面の遺構面を検出した。各遺構面で、遺構検出・遺構掘削を行い、実測図作成・写真撮影による記録作業を実施した。なお、第4面は掘削下限深度にあわせた面であり、明確な遺構面ではな

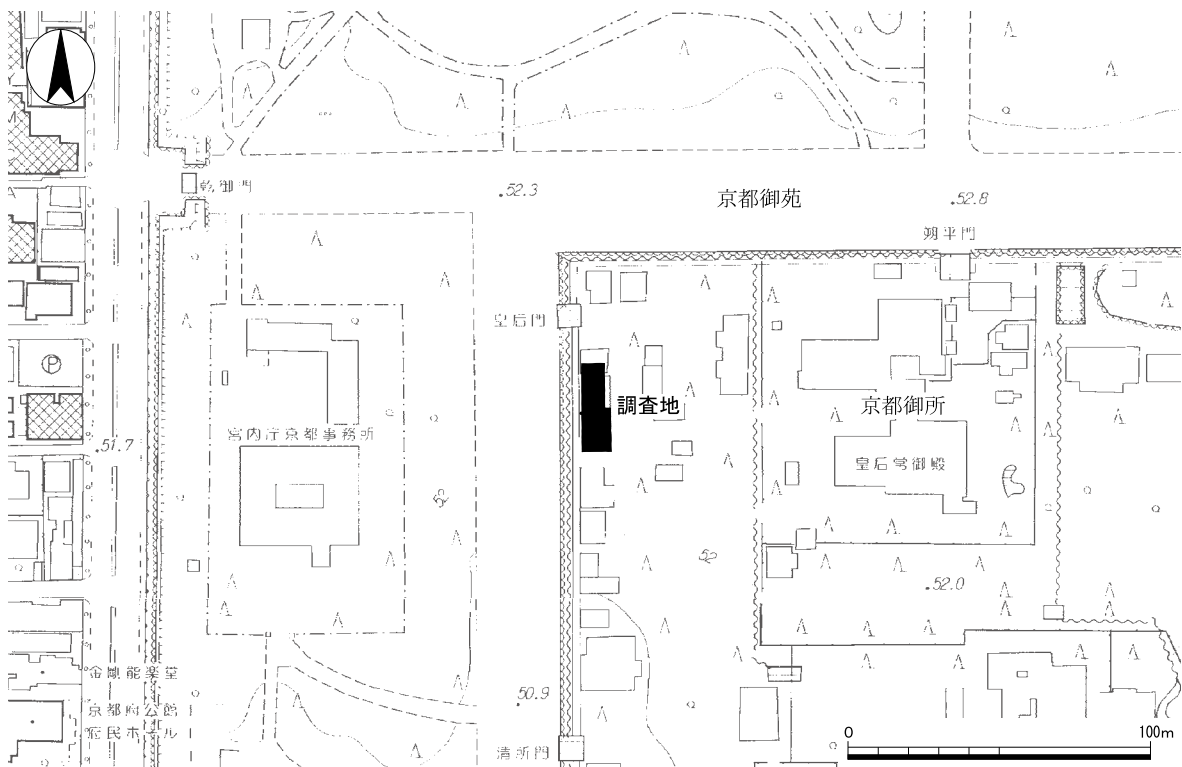


図1 調査位置図 (1:2,500)

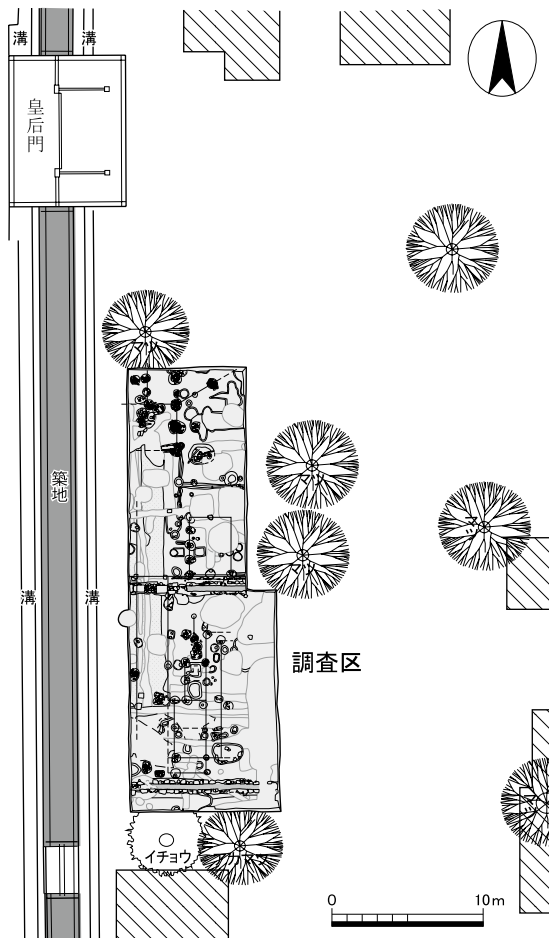


図2 調査区配置図 (1 : 500)



図3 調査前全景 (北から)



図4 作業風景 (南から)

い。また、この面で検出した遺構の掘削は行わず、平面的に記録を行った。この後、埋戻しは行わず、器材搬出などを終え、8月28日にすべての調査を終了した。

なお、調査中には適宜、文化財保護課の臨検・指導を受けた。

## 2. 位置と環境

### (1) 位置と環境

調査地は京都御苑内の京都御所北西部に位置し、公家町遺跡に該当する。天皇の御所である内裏は、平安京遷都時には平安宮の中央やや東寄りにあった。天徳4年(960)、初めて内裏が焼失し、以来、度々焼失と再建が繰り返される。再建の間、貴族の邸宅を仮御所としたが、やがてそこを里内裏と呼ぶようになる。内裏は、安貞元年(1227)の火災以後、再建されず、里内裏が恒常化した。明德3年(1392)、南北朝が統一され、里内裏の東洞院土御門殿が内裏として定まった。現在の京都御所(以下「御所」という)はその後身である。

御所も火災などで焼失と再建を繰り返した。安土桃山時代に入り、織田信長は内裏の修造を行った。その後、豊臣秀吉は京都の都市改造の一環として、内裏の周囲に公家を集住させる公家町の再

編を行い、御所を造営した。江戸時代には、徳川家康による慶長18年（1613）完成の慶長度造営を皮切りに、寛永19年（1642）寛永度造営が行われ、これ以降は火災による焼失のたびに再建・修復が行われ、承応度造営：承応4年（1655）、寛文度造営：寛文3年（1663）、延宝度造営：延宝3年（1675）、宝永度造営：宝永6年（1709）、寛政度造営：寛政2年（1790）、安政度造営：安政2年（1855）が知られる。これらの中で宝永度造営では、敷地が東と北の本院御所（明正院）敷地へ広く拡張され、寛政度造営では裏松固禪の『大内裏図考証』に基づき、古制に復して再建された。その時、調査地周辺は空地であったが、寛政6年（1794）の中宮の入内の時に御殿などが新築され（「寛政度造営」の一環とする）、また文化14年（1817）に女御入内の時に修復された（以下「文化度造営」という）。その後も新たな入内の度に修復された。現在の京都御所は主に安政度造営の建物である。

## （2）周辺の調査（図5、表1）

調査地が所在する御所の周辺は、国民公園「京都御苑」として自然や景観が保全されているため、原則的に開発行為は行われていない。従って発掘調査の実施例は多くない。

平安京北東隅で行われた調査1では、平安時代的一条大路路面と溝を検出した。御所内北東部で行われた調査2では、平安時代の路面と溝、平安時代後期から江戸時代後半の遺構面（5面）を検出した。建春門南西の御所内で行われた調査3では、江戸時代である宝永の火災層と天明の火災層、寛政度造営の築地跡を検出した。御所宣秋門前で行われた調査4では、弥生時代後期の土坑、

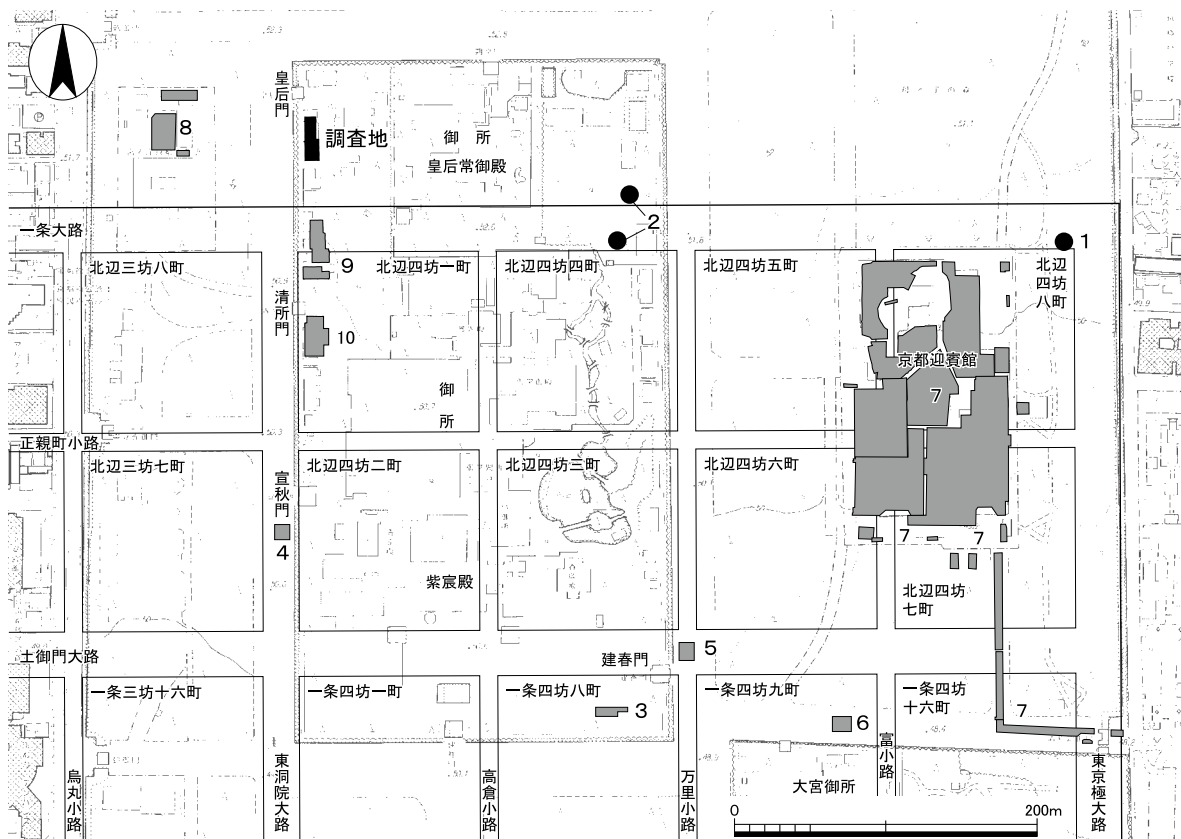


図5 周辺調査位置図（1：5,000）

表1 周辺調査文献一覧表

調査番号	調査文献
1	近藤喬一・松井忠春「平安京東北隅一条大路・東京極大路の調査」『古代文化』第27巻6号 古代学協会 1975年
2	松井忠春・佐々木英夫「平安京推定一条大路跡第二次調査概要」『古代文化』第29巻9号 古代学協会 1976年
3	長戸満男「平安京左京一条四坊」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
4	上村和直「平安京左京北辺三坊」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
5	鈴木久男・西村洋子「平成13年度発掘調査」『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
6	東 洋一「平成14年度発掘調査」『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
7	『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
8	丸川義広『公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
9	小松武彦『平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
10	小松武彦『平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-12 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年

平安時代後期の土坑、中世の土坑・溝など、中世から近世の道路跡・土坑を検出した。御所建春門前で行われた調査5では、江戸時代中頃の礎石建物（花山邸か）と江戸時代後半の道路を検出した。大宮御所北側で行われた調査6では、江戸時代前期の礎石建物・穴蔵・土蔵・築地など鷹司家邸跡と考えられる遺構群を検出した。京都御苑北東部で京都迎賓館建設に先立ち行われた広範囲に及ぶ調査7では、古墳時代から飛鳥時代の流路、平安時代の園池や道路、鎌倉時代の地業・道路・柱列、室町時代の建物・濠、安土桃山時代から江戸時代の公家町の成立と変遷を示す遺構群を検出した。京都御苑北西部で行われた調査8では、平安時代の土坑と室町時代の礫敷面、安土桃山時代から江戸時代の礎石建物・井戸・溝・集石・道路など一条邸と考えられる遺構群を検出した。清所門北東側の御所内で行われた調査9では、江戸時代中期から後期の取次部屋・対屋の建物跡・雨落ち溝などを検出した。清所門南東側の御所内で行われた調査10では江戸時代の番所の建物跡・石組溝などを検出した。

#### 参考文献

『京都市の地名』 平凡社 1987年版

京都市『史料京都の歴史 第7巻上京区』 平凡社 1980年

岩間香ほか『大工頭中井家建築指図集-中井家所蔵本-』 思文閣出版 2003年

### 3. 遺 構

#### (1) 層序 (図版5、図6)

調査地の地形は既存建物を解体した後、整地されていたため、ほぼ平坦である。工事による掘削下限深度は建物設計GL±0から-55cm(標高51.935m)である。現地表面標高は52.5m前後であり、実際の掘削深度は最大で56.5cmが掘削下限深度である。

層序は、現代盛土が厚さ10cm前後である。以下、その下が江戸時代末期から近代の層で厚さ15～20cm(この層上面が第1面)、江戸時代後期の整地層が厚さ15cm前後(この層上面が第2面)、江戸時代前期から中期の整地層が厚さ10cm前後(この層上面が第3面)である。第4面は掘削下限深度の面であり、以下については遺構が破壊されず、現地保存されるため掘削していない。

#### (2) 遺構の概要

調査では掘削下限までに4面の遺構面を調査した。第1面では江戸時代末期から近代の建物跡や土坑、柱穴などを検出した。第2面では江戸時代後期から末期の建物・塀・門跡、路面、カマド、東西石組溝、一部が石組暗渠である東西溝、土器溜などを検出した。第3面では江戸時代中期のやや北に振れる東西石組溝、北東から南西方向の溝、弧を描く幅の狭い溝を伴う石組遺構、柱穴、土坑などを検出した。第4面は前述したように文化財保護課の指導による掘削下限深度の面であり、江戸時代前期から中期の石組溝、石組みと思われる溝、柱穴、土坑、焼土層などを検出したが、遺構は掘削していない。

#### (3) 第1面 (図版1・9)

第1面では調査区南側で土坑や柱穴、集石などを検出した。調査区中央部は近代建物跡の布掘り基礎とインフラ埋設坑で攪乱されており、その東側で瓦を廃棄した土坑52や瓦溜り、瓦が出土した柱穴85などを多く検出した。同北側では第1面は削平されており、下面の遺構面が現れている。この面は検出遺構と出土遺物の状況から江戸時代末期から近代の遺構面と考える。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
江戸時代前期 ～中期	石組溝298、溝293・294、土坑279	第4面
江戸時代中期	石組遺構267、石組溝272、溝277、土坑262・266・275	第3面
江戸時代後期 ～末期	建物1・2・4・9～11、塀3・5～7、門8、柱列12、石組溝177、溝180、カマド37、土器溜93・215、土坑82	第2面 (寛政度～安政度造営)
江戸時代末期 ～近代	柱穴85、土坑52	第1面

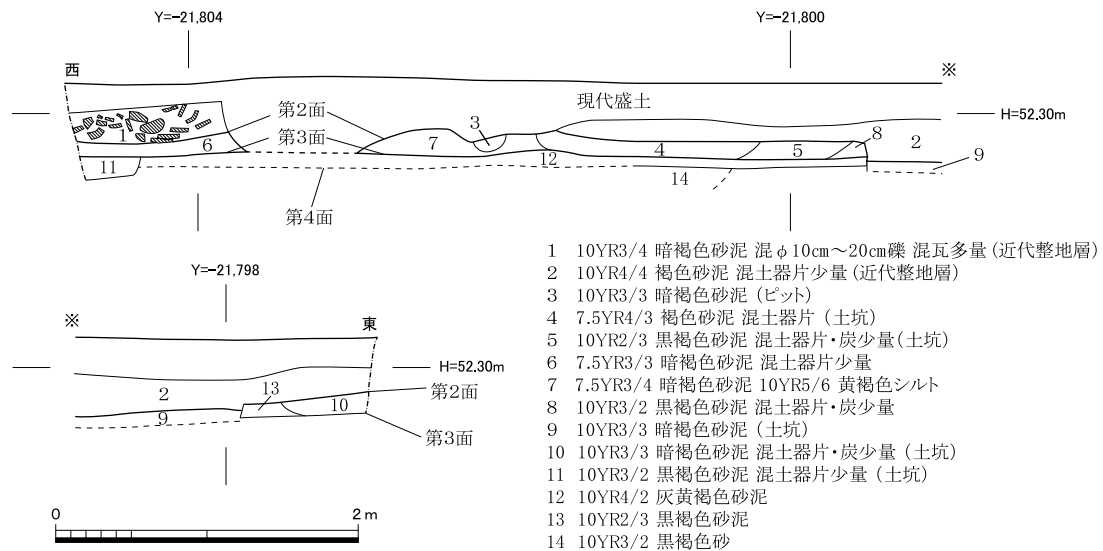


図6 調査区北壁断面図 (1:50)

#### (4) 第2面 (図版2・9)

第2面で検出した主な遺構は、建物1・2、塀3、建物4、塀5～7、門8、建物9～11、柱列12、路面、石組溝177、溝180、カマド37、土坑82、土器溜96・215である。この面は検出遺構と出土遺物の状況から江戸時代後期から江戸時代末期までの時期であり、寛政度造営から安政度造営以降の遺構面と考える。なお、後述する「柱穴」には、礎石を据えるために小石を詰めて根固めたもの、礎石のみのもの、素掘りのものがある。

**建物1** (図7、図版10) 調査区北西部で検出した。東西1間 (柱穴15・182) 以上、南北2間 (柱穴35・24・15) の礎石建物の北東部にあたる。柱間は東西約2.0m、南北約1.55m前後である。柱穴の掘形は径0.65～1.2m、深さ0.2m前後、平面形は円形または楕円形である。柱穴内には径0.05～0.2mの礫が密に詰まっている。礎石の根固めと考えられる。

柱穴35は礎石33と柱穴34が重複する。柱穴35は径約0.9mの円形掘形で、柱穴内には径0.1～0.2mの礫が密に詰まり、幅0.19m、長さ0.21mの石が南北方向で平坦に据えられる。礎石33は柱穴35の西半を切り込む東西方向の掘形で、幅約0.2m、長さ約0.8mの長方形の石と幅約0.15m、長さ約0.2mの石が東西方向で平坦に座に据えられる。柱穴34は径約0.4mの円形掘形で、柱穴内には径0.1m前後の礫が密に詰まり、幅約0.1m、長さ約0.2mの石が南北方向で平坦に据えられる。

**建物2** (図7、図版10) 調査区北西端、建物1北辺に取り付き、柱穴182の北方向に2間 (柱穴4・3) 以上検出した。礎石建物の東柱列にあたる。柱間は南から約0.6m、1.1mである。柱穴の掘形は径0.5～0.6m、深さ0.2m、平面形は円形である。柱穴内には径0.1m前後の礫がまばらに入る。柱穴4には幅約0.2m、長さ約0.3mの石が南北方向で平坦に据えられる。

**塀3** (図8) 調査区北部、建物1北東隅柱穴15から北東に延びる2間 (柱穴16・58) 以上を検出した。塀の柱列であろう。柱間は約1.4mである。柱穴16は掘立柱で、掘形は径約0.35m、深さ約0.2m、平面形はほぼ円形である。柱穴58の掘形は径0.7m前後、深さ約0.2m、柱穴内には径0.05



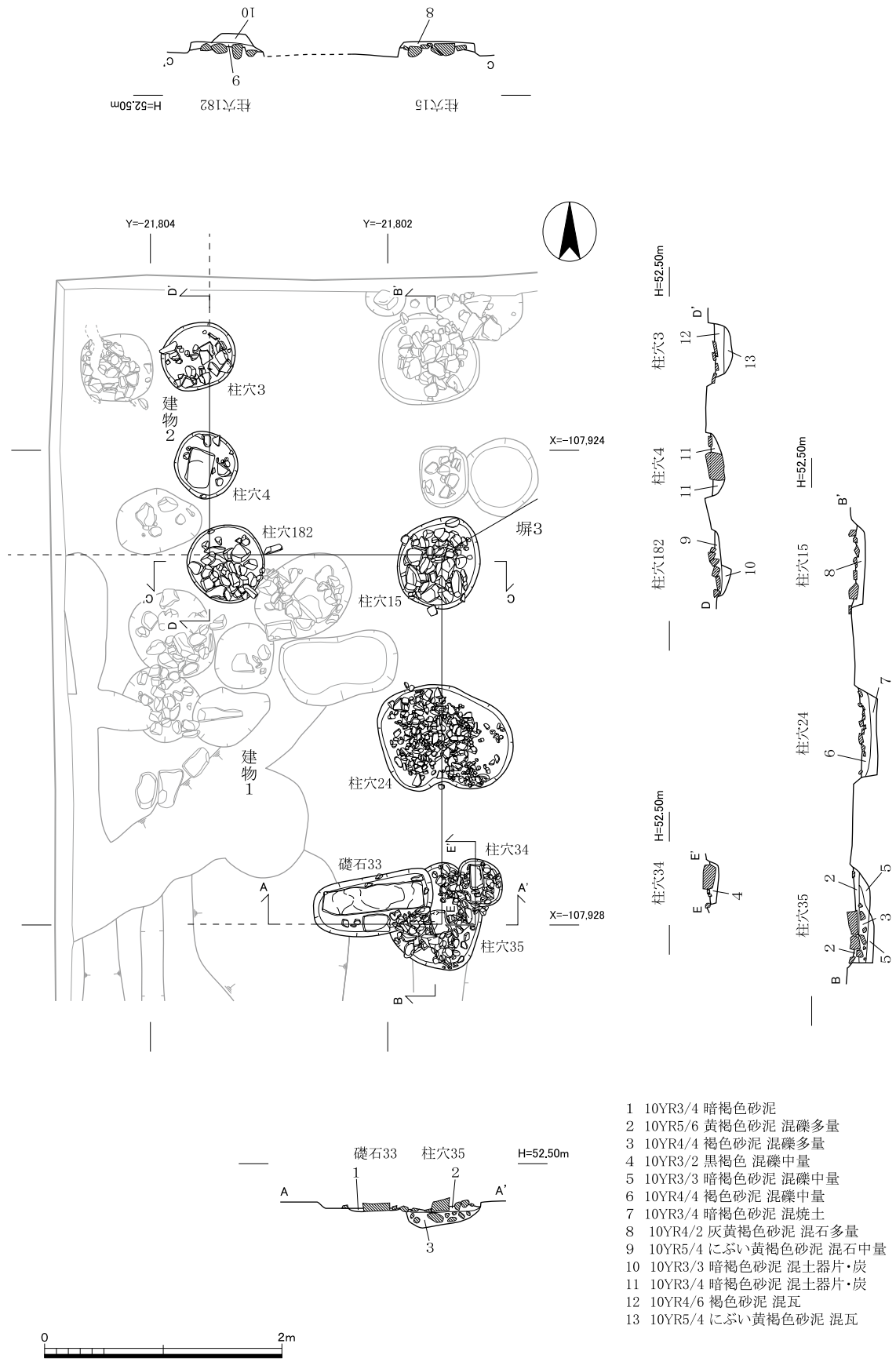


図7 建物1・2実測図(1:50)

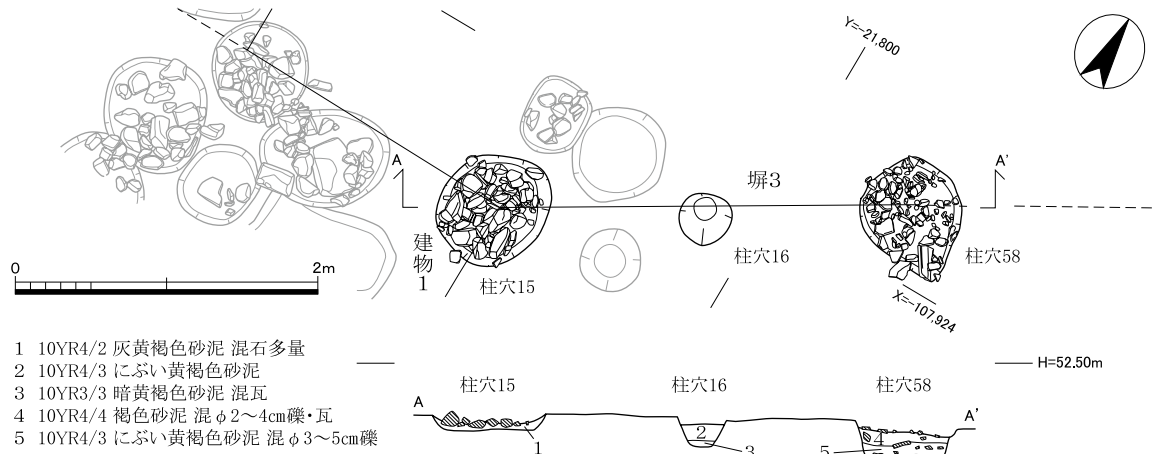


図8 塀3実測図 (1:50)

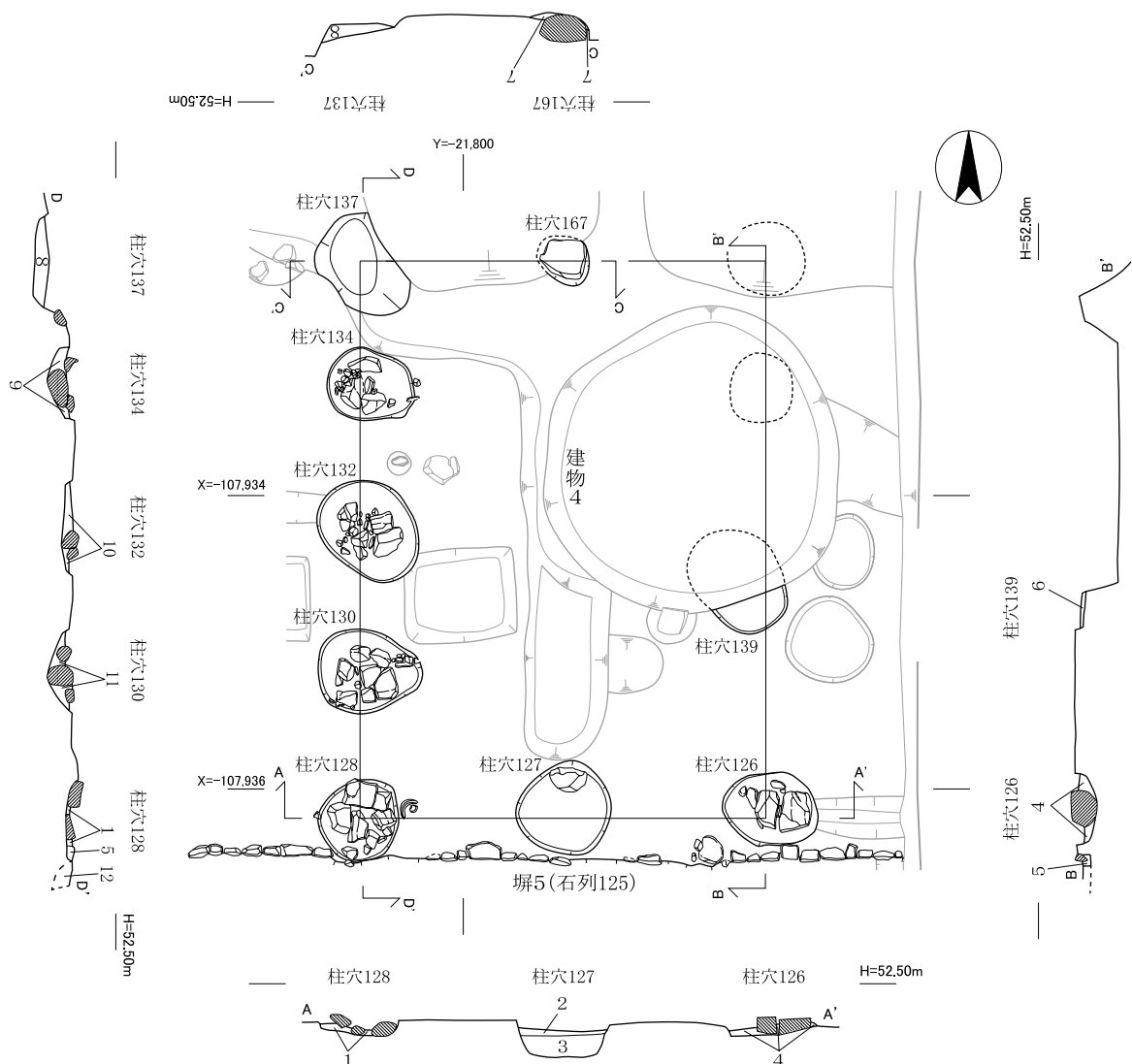


図9 建物4・塀5実測図 (1:50)

～0.2mの礫が密に詰まっている。礎石の根石と考えられる。

**建物4**（図9、図版10） 調査区中央部で検出した。東西2間、南北4間の礎石建物である。柱間は東西約1.4m、南北約0.95mである。柱穴の掘形は主に径0.5～0.7m、深さ0.05～0.2m、平面形は楕円形である。柱穴内は径0.15m前後の礫を入れ、幅約0.25m前後の石を平坦に据えるもの以外に、中に礫石の入らない柱穴137、径約0.3mの1石が平坦に据えられた柱穴167がある。東辺柱列（柱穴126・139）は土坑により北側2基は攪乱されたと思われ、想定される東側の礎石建物西辺とすれば3間となる。

**堀5**（図9） 調査区中央部で検出した。門8の礎石166（後述）から建物4南辺柱列を共有して東へ延びる。南側に東西の石列125を伴う。石列の長さは東西約4.9m、径0.1～0.2mの石が南に面を揃えて東西に並び、約0.1mの段差で南が低くなる。石列内には径0.2m前後のやや大きい石があり、石の距離は約1.5mである。

**堀6**（図10、図版11） 調査区中央部で検出した。堀5と門8との接続部から南へ延びると考えられる柱列である。柱穴124・117・112・199の4基を検出し、南北3間以上、柱間は約2.1m前後である。柱穴124の掘形は短径約0.6m、長径約1.0m、深さ約0.2mの不整楕円形、柱穴内には幅0.2m前後、長さ0.35m前後のやや大きい石が入る。他の柱穴の掘形は径0.5m前後、深さ0.2m前後、平面形は隅丸方形および円形である。この堀6の西側には固く整地（後述する路面の一部）され、路面状になっており、通路であったと考えられる。

**堀7**（図10） 調査区中央部南寄り、堀6から約1.7m東に並行する1間分（柱穴121・115）を検出した。柱間は約1.5mである。柱穴の掘形は、柱穴121は径0.3m前後、深さ約0.2m、平面形は円形、柱穴115は径0.5m前後、深さ約0.15m、平面形は円形で柱穴内には0.1m未満の礫が密に詰まっている。

**門8**（図11、図版11） 調査区中央部で検出した。堀5の西延長に据えられた礎石1間分であり、門と考えられる。礎石列の北側と南側には路面が広がる。柱間は約1.9mである。礎石は一辺0.25m前後、厚さ0.2m前後の方形である。

**建物10**（図12、図版11） 調査区南半中央部で検出した。南東の柱穴102がややずれるが、東西1間、南北2間の礎石建物である。南辺（柱穴105・102）は建物11と東辺（柱穴100・101・102）は建物9と共有する。柱間は東西約1.4m、南北1.2m前後である。柱穴の掘形は径0.5～0.7m、深さ0.1～0.2m、平面形は円形である。柱穴内に0.1m前後の礫が密に詰まっている柱穴100、径0.2m前後の石が平坦に据えられている柱穴102・105・109・110がある。

建物内側には土坑2基（土坑157・158）が南北に並ぶ。土坑157の平面形は南北に長い隅丸方形であり、掘形は東西約0.9m、南北約1.2m、深さ0.2mである。土坑158の平面形は不定形であり、掘形は東西約1.0m、南北約0.9m、約0.25mである。

**建物11**（図13、図版11） 調査区南側中央部で検出した。東西1間、南北3間の礎石建物である。北辺（柱穴102・105）は建物10南辺と、東辺（柱穴102・189・196・201）は建物9と共有する。柱間は東西は約2.1m、南北は北から1.8m、1.9m、1.0mである。柱穴の掘形は、径0.5～0.7

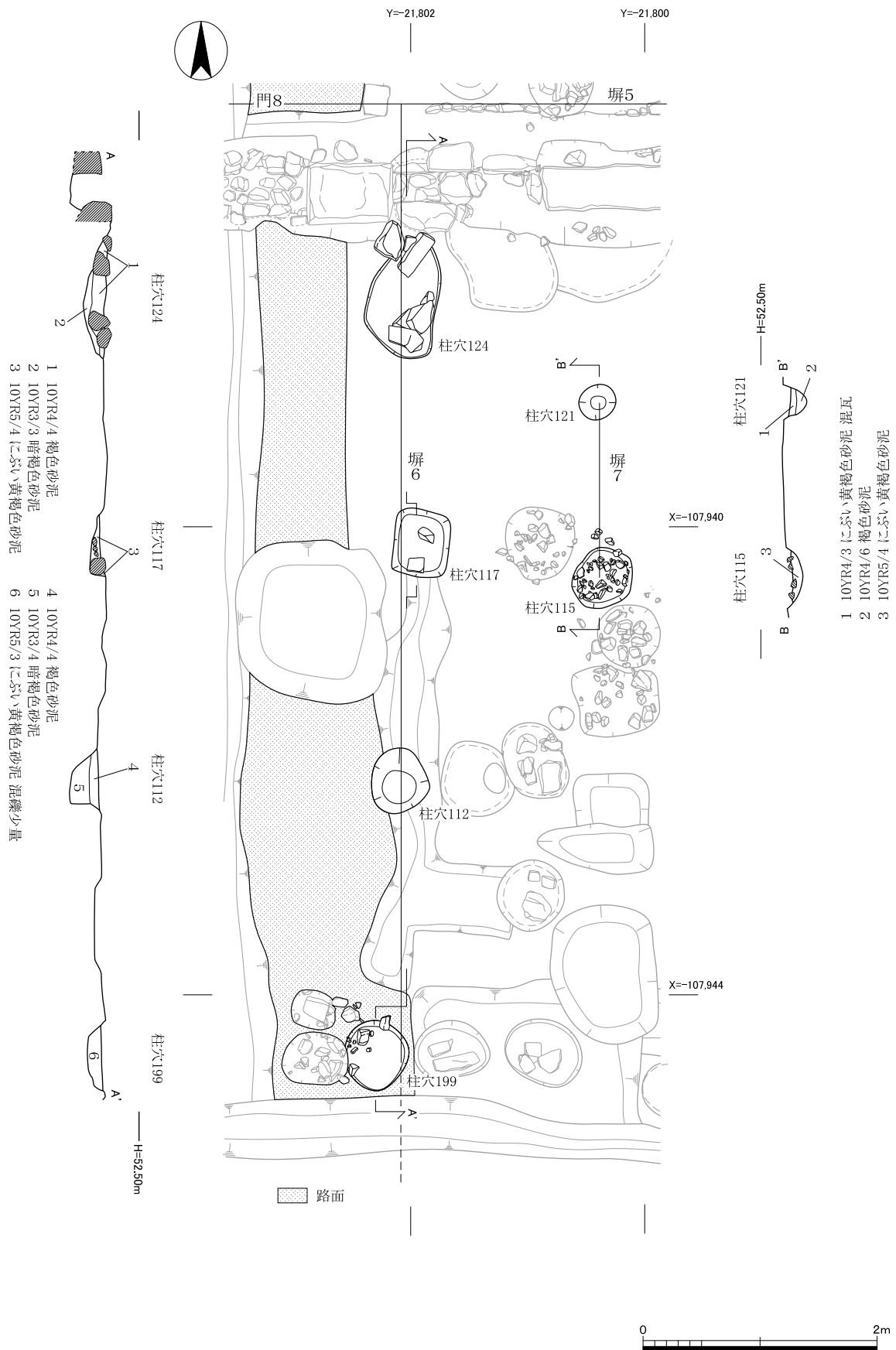


图10 塀6・7実测图 (1:50)

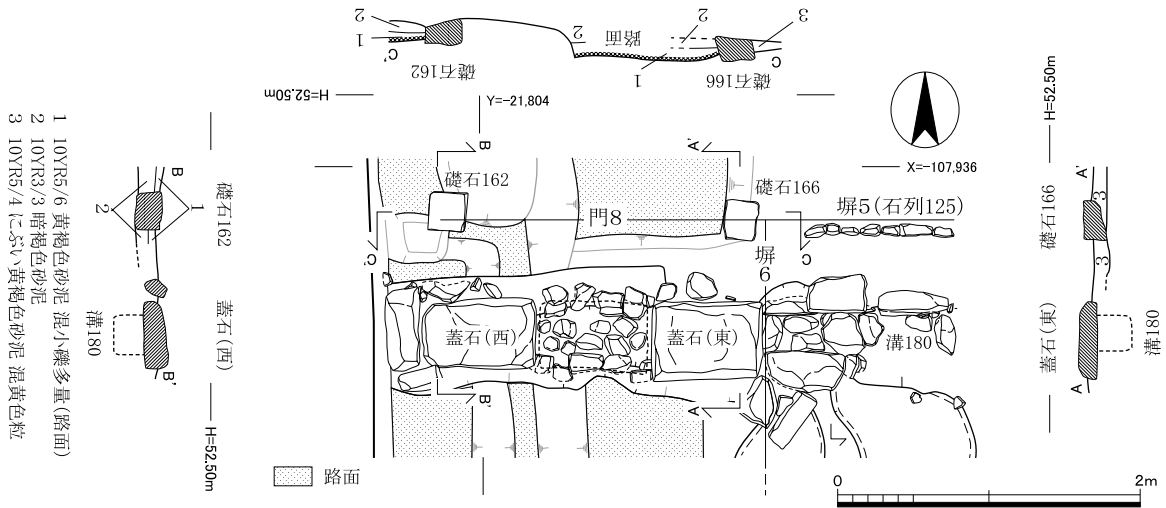


図11 門8実測図 (1:50)

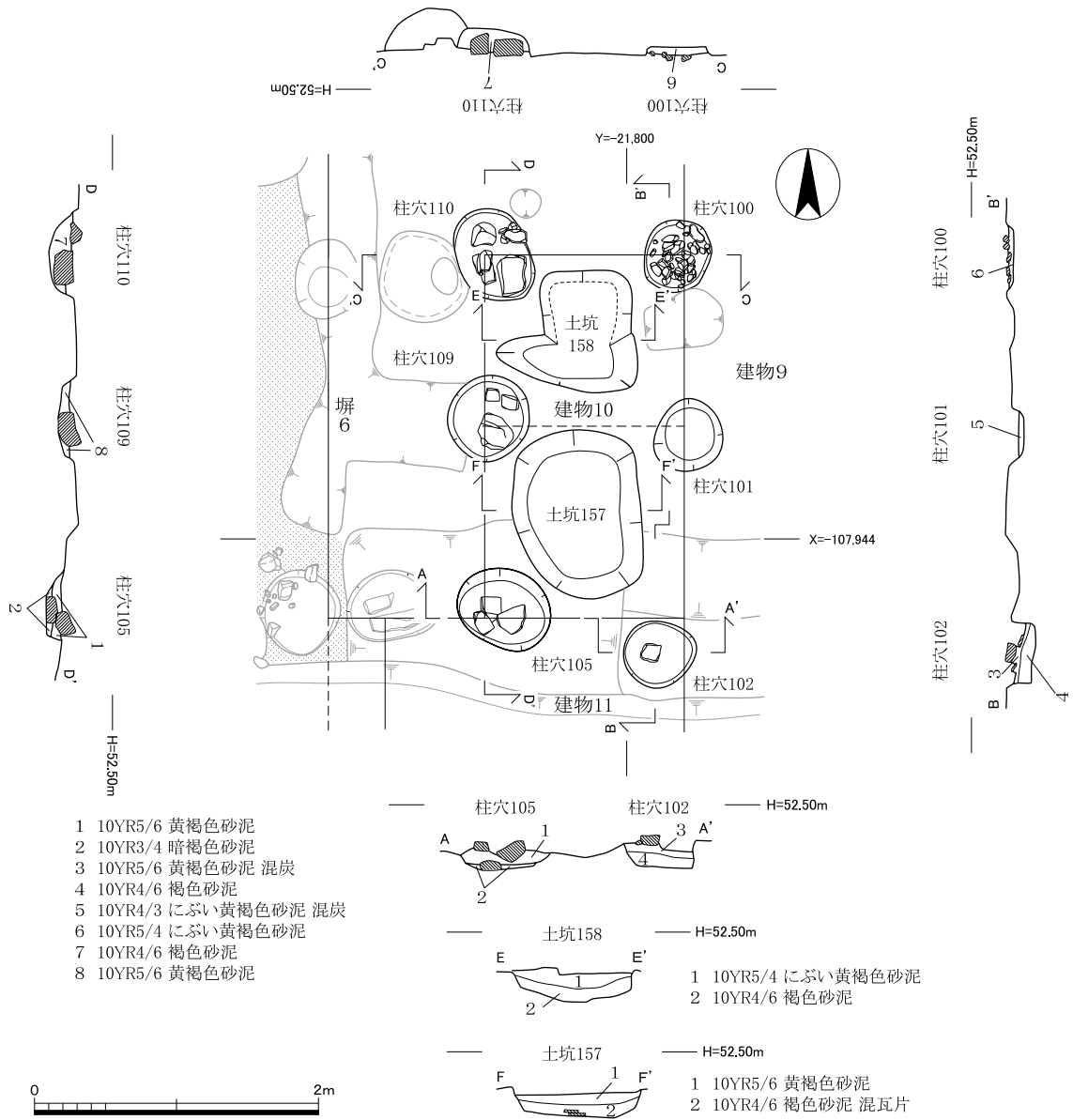


図12 建物10実測図 (1:50)

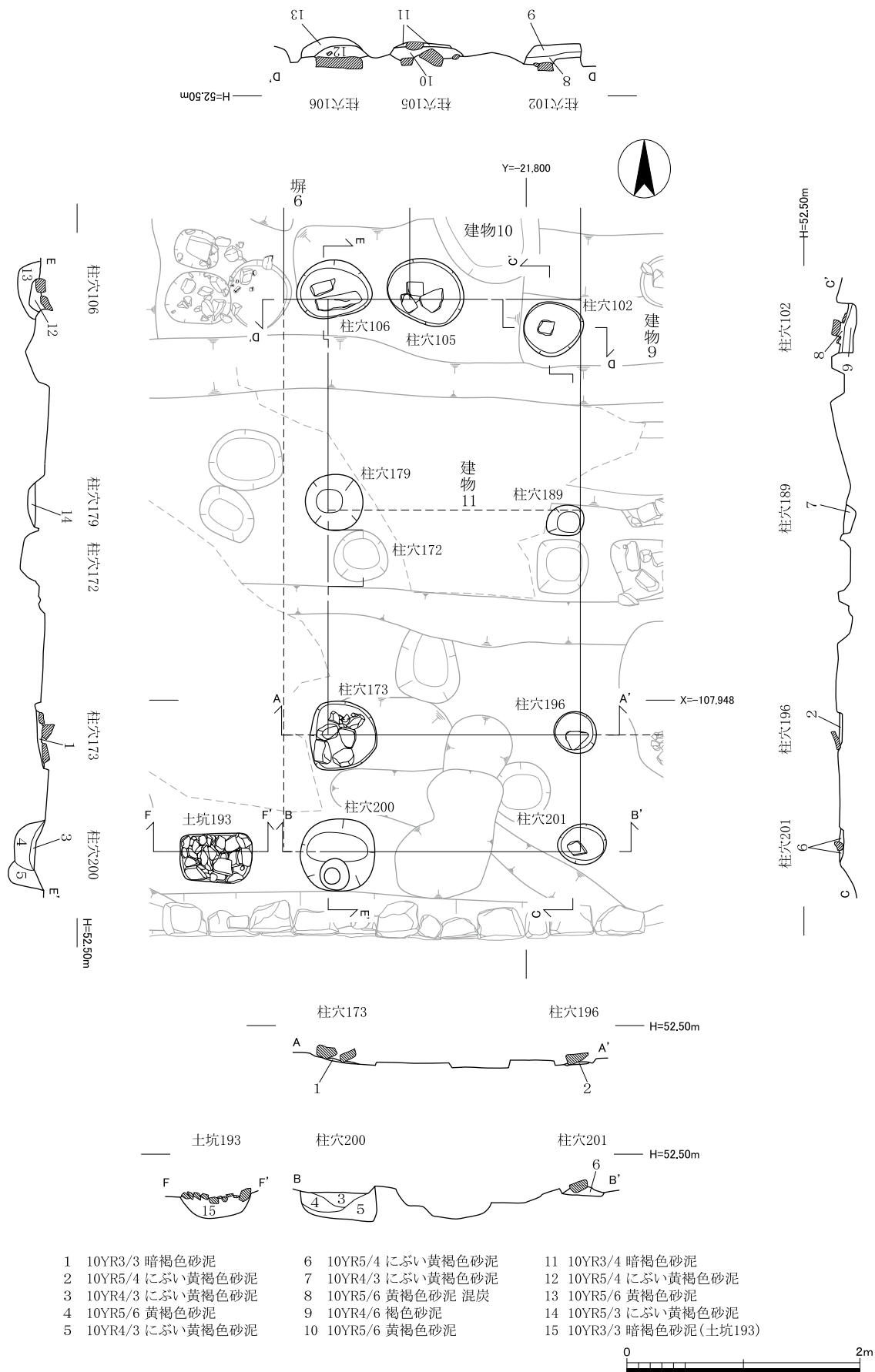


図13 建物11・土坑193実測図(1:50)

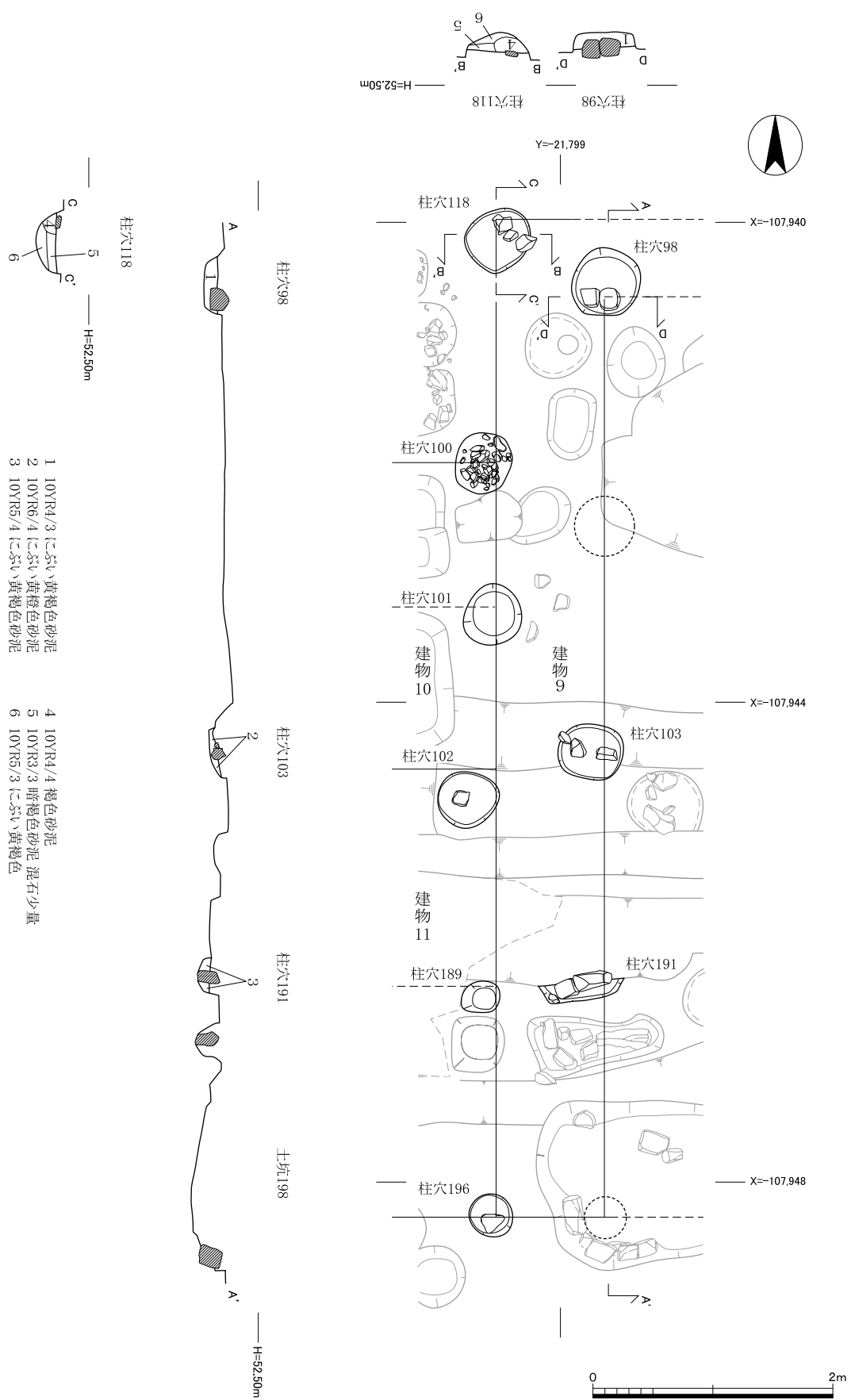


图14 建物9実測图 (1 : 50)

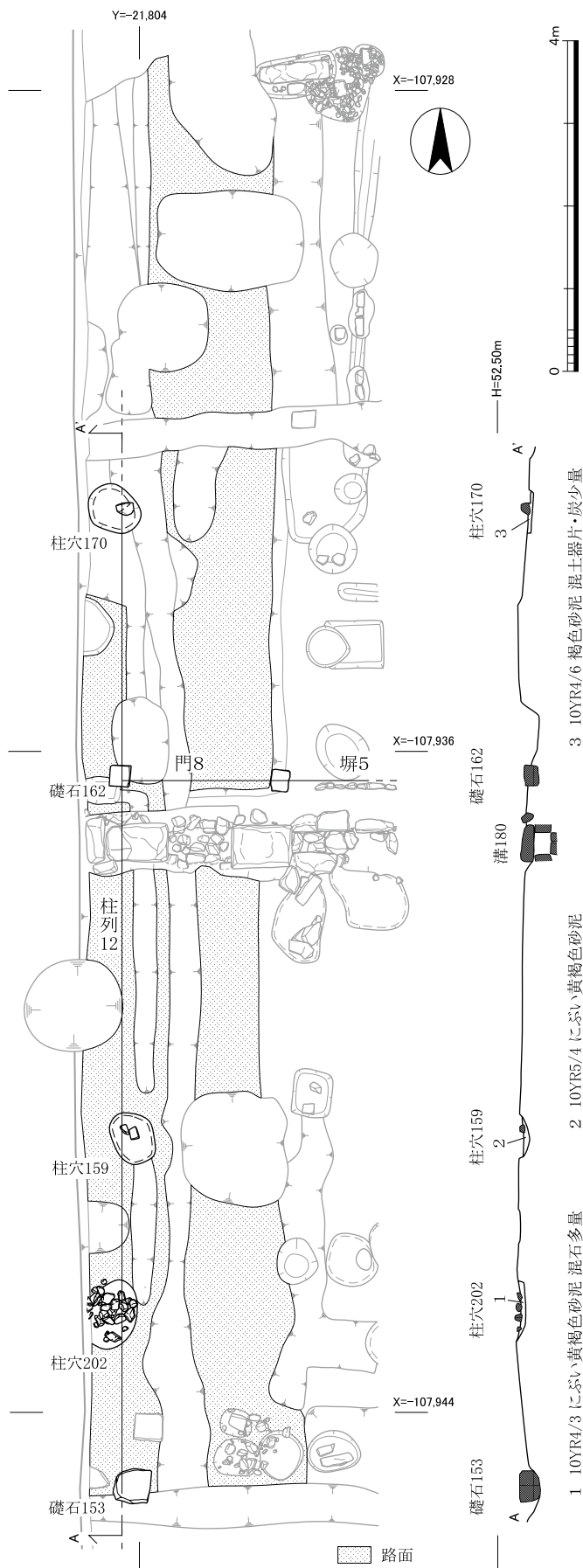


図15 路面・柱列12実測図 (1 : 80)

径0.1m前後のものがある。平面形はほぼ円形である。柱穴内は、礫や石がない柱穴179・189・200、径0.2m前後の石が平坦に据えられた柱穴102・196・201、径0.3m以上の石が複数入る柱穴106・173がある。

土坑193(図13) 調査区南西部、建物11南辺の西側延長で検出した。掘形は東西約0.6m、南北約0.4m、深さ0.2mであり、平面形は隅丸方形である。土坑内には礫が密に詰まっている。自然透水枿あるいは建物11に関連する遺構の可能性はある。

建物9(図14、図版11) 調査区南東部で検出した。建物10・11の東に沿って南北方向に並ぶ柱穴列(柱穴98・103・191)である。攪乱されたと考えられるものを含めて南北4間、共有する建物10・11の東辺柱列とその北延長の柱穴118と並び、礎石建物の廊下(幅約0.9m)にあたると思われる。柱間は1.9m前後である。柱穴98・103の掘形は径0.6m前後、深さ約0.2m、平面形は円形である。柱穴内には径0.2m前後の石がある。柱穴191は北半分が削平され、掘形は南北約0.3m、東西約0.7m、深さ約0.2m、平面形は半楕円形である。柱穴内には径0.2~0.7mの石が入られる。柱穴118の掘形は径0.6m前後、深さ約0.25m、平面形は円形である。柱穴内には径0.1~0.2mの石がある。

路面(図15、図版11) 調査区東部で検出した南北方向の路面である。径0.1



～0.3mの礫が多く入り、固く締まった硬化面となっている。南北の長さは約17.4m、東西幅は2m前後、西側は調査区外へ延びる。門8を挟んで南北に延びる通路と考えられる。

柱列12（図15） 調査区西端で検出した南北方向の柱穴列である。門8の西側礎石162の北側へ1間（柱穴170）、南側へ3間（柱穴159・202、礎石153）を検出した。柱間は北から3.3m、4.2m、2.1m、2.1mである。柱穴の掘形は径0.6m前後、深さ約0.1m、平面形は楕円形である。柱穴内に径約0.15m前後の礫が入る柱穴170・159、径0.1m前後の礫が密に詰まっている柱穴202がある。礎石153は一辺約0.4m、厚さ約0.15mの石を平坦に据え、礎石にしたと考えられる。この柱列12は既述の路面を掘り込んで成立している。

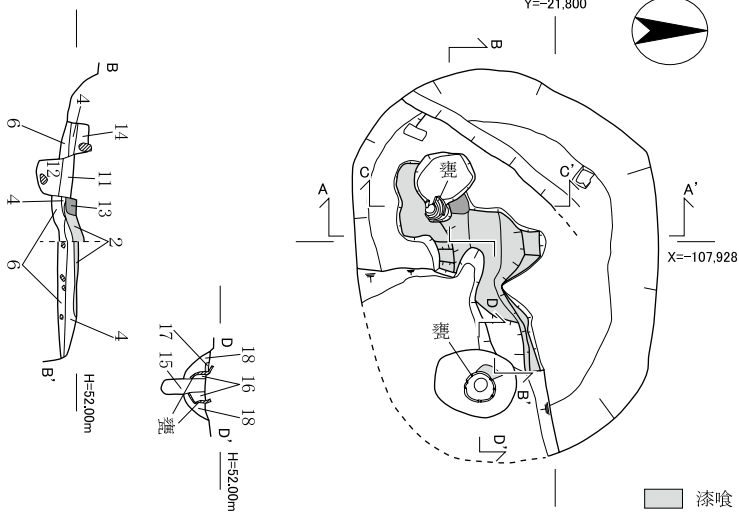
石組溝177（図版6・12） 調査区南端で検出した東西方向の石組溝である。調査区外は西側の築地内溝につながり、東側に延びると考えられる。東西の長さは約9.7m、掘形の幅は1.3～1.4m、深さは約0.5mである。側石は主に割石で、幅約0.15m、長さ約0.2m、厚さ約0.1mの石と幅約0.3m、長さ約0.6m、厚さ約0.5mの石があり、1段から2段積み上げている。内法は幅約0.4m、深さ約0.4mである。底面は大半が漆喰を塗り、厚さ約0.05mの漆喰層となっているが、西側では敷石の可能性もある。絵図（図23）ではこの溝の周囲には「湯殿」があり、その排水溝と考えられる。

溝180（図版6・10～12） 調査区中央部で検出した東西方向の溝である。塀5・門8に並行して南側に位置する。東半は側石を検出できなかったが、抜き取り穴があることから本来石組溝であったと考えられる。調査区外は西側の築地内溝につながり、東側に延びると考えられる。東西の長さは約7.7m、掘形の幅は0.7～1.1m、深さ約0.4mである。側石は幅約0.2m、長さ約0.5m、厚さ約0.3mの割石と幅約0.15m、長さ約0.25m、厚さ約0.1mの自然石を用いて1～2段の石組みを積み上げている。底面には径0.2m前後、厚さ0.05mの平坦な石を敷き詰める。溝の内法は幅約0.3m、深さ約0.3mである。門8の南側部分は、溝の上に蓋石が2石据えられている。東西幅0.7m前後、南北幅約0.5m、厚さ約0.15mの割石である。この蓋石は路面と門との通路を確保するものであり、検出した2石の間には蓋石があり、隙間なく溝を塞いでいたと考えられる。

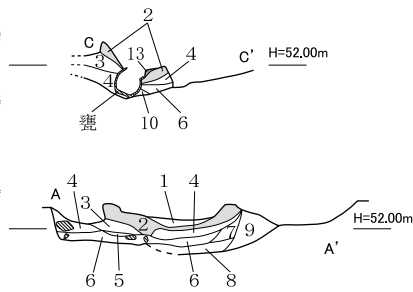
溝の東半では底面に漆喰が塗られている。漆喰層は、東西の長さ約3.9m、幅約0.3m、厚さは約0.15mである。漆喰層の下には敷石が所々に残っており、溝の修復のため漆喰が塗られたと考えられる。

カマド37（図16、図版12） 調査区北側中央部で検出した土坑である。掘形が東西約2.6m、南北約2.0mの土坑内に、カマドの本体と考えられる硬化層があることからカマドとした。本体は北西部と南東部が削平され、東西約1.5m、南北約1.0m、厚さ約0.3mである。本体の上層は漆喰の焼けた硬化層であり、厚さ約0.1m前後である。その上には炭や焼土が混じる埋土があった。カマド本体の西側と東側で埋甕を検出した。西側の埋甕（図18-51）はカマド本体に埋まり、周囲には炭塊が残っていた。消し炭を処理するものと考えられる。東側の埋甕（図18-50）は本体に接して埋まり、径0.3～0.35mの掘形がある。甕内部には漆喰片や礫が混じり、甕を貫ぬく杭痕がある。この甕の性格は不明である。カマド本体と埋甕の検出状況から、カマドは東西方向で西側が焚

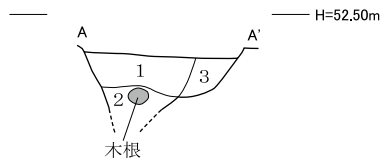
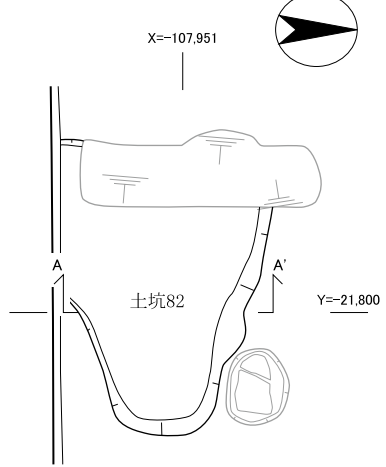
カマド37



- 1 7.5YR4/6 褐色砂泥 混炭焼土多量
- 2 10YR8/4 浅黄橙色 漆喰層
- 3 10YR4/4 褐色砂泥 混φ1~5cm礫
- 4 10YR4/6 褐色砂泥
- 5 10YR6/4 にぶい黄褐色 粘土
- 6 10YR4/4 褐色砂泥 混φ1~5cm礫
- 7 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥
- 8 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 10 10YR4/4 褐色砂泥 混φ1~5cm礫
- 11 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 12 10YR3/4 暗褐色砂泥 混礫多量
- 13 炭層
- 14 10YR5/4 にぶい黄褐色 細砂
- 15 10YR3/3 暗褐色砂泥 砂っぽい
- 16 10YR7/3 にぶい黄褐色砂泥 混漆喰
- 17 10YR8/4 浅黄橙色 漆喰層
- 18 10YR4/6 褐色砂泥

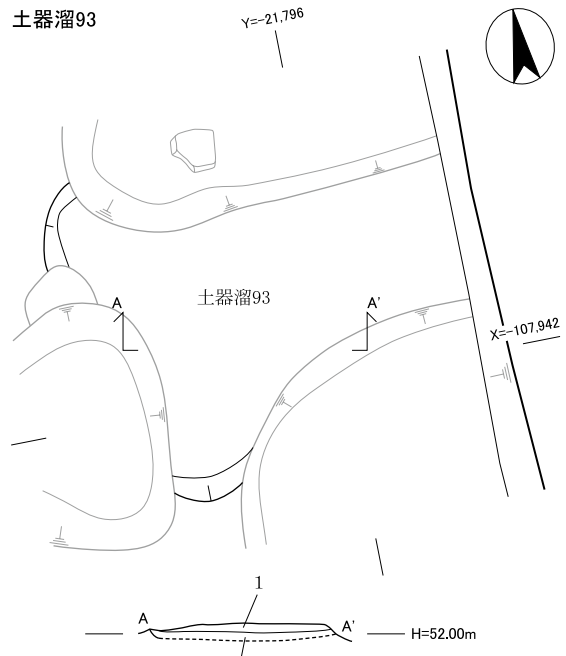


土坑82



- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥 混土器片多量・炭
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥 混炭
- 3 10YR3/4 暗褐色砂泥 混土器片

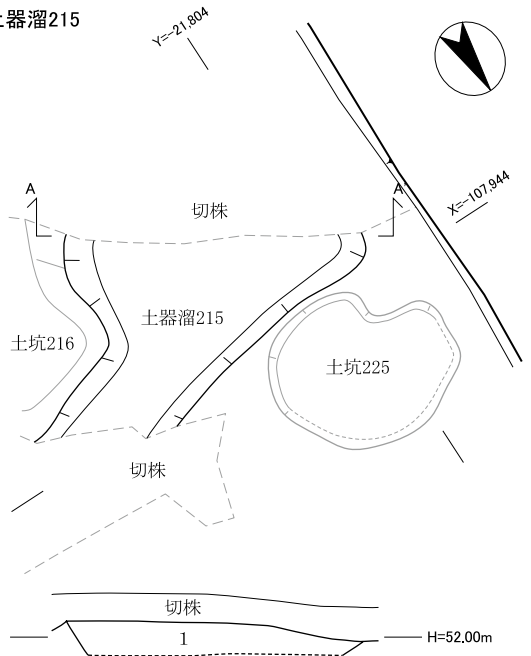
土器溜93



- 1 2.5Y4/6 オリーブ褐色粗砂
- 2 10YR3/4 暗褐色粗砂 混土器片極多量



土器溜215



- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥 混土器多量



図16 カマド37、土坑82、土器溜93・215実測図 (1 : 50)

口と考えられる。

**土坑82** (図16) 調査区南端中央部で検出した。掘形は東西約2m、南北約1.4m、深さ0.4m以上、掘削下限深度以上のため完掘していない。平面形は不定形である。埋土は黒褐色から暗褐色の砂泥である。多量の土師器皿などが出土したことから、土器などを処理した廃棄土坑であろう。

**土器溜93** (図16) 調査区中央部東側で検出した。北側と南側は瓦を廃棄した近代土坑に掘り込まれ、西側は攪乱される。掘形は東西約2.7m、南北約2.3m、深さは0.15m以上、掘削下限深度以上のため完掘していない。平面形は不定形である。埋土は褐色の粗砂で、多量の土師器皿が出土した。土器など処理した廃棄土坑であろう。

**土器溜215** (図16) 調査区南側の東端で検出した。切株の隙間から検出した。掘形は南北約1.4m、東西約2.6m、深さは約0.2m以上、掘削下限深度以上のため完掘していない。平面形は不定形である。埋土は黒褐色砂泥で多量の土師器皿が出土した。土器などを処理した廃棄土坑であろう。

### (5) 第3面 (図版3・13)

第3面で検出した主な遺構は、石組溝272、石組遺構267、土坑266、溝277である。調査区中央部と南側では柱穴や土坑などを検出したが建物の復元はできなかった。この面は検出遺構と出土遺物の状況から江戸時代中期、宝永度造営から寛政度造営直前までの遺構面と考える。

**石組溝272** (図版8・13) 調査区北側で検出した西でやや南に振れる東西方向の溝で、調査区外は西側の築地内溝につながり、東側に延びると考えられる。石組みは西端と中央部に、溝底面の石敷きは西端に一部遺存している。本来は1段の石組溝と考えられる。溝両側には土坑262や土坑275などがあり、側石の抜き取り痕と考えられる。東西の長さは約7.6m、掘形の幅は約1.8m、深さ約0.3mである。側石は幅約0.15m、長さ約0.45m、厚さ0.2m前後の割石である。底石は径0.05m前後と幅約0.2m、長さ約0.3mの自然石である。溝の内法は幅約0.3m、深さ約0.3mである。

**石組遺構267** (図版8・13) 調査区北側の東寄りで検出した石組溝と集石を伴う遺構である。掘形は幅約1.1m、長さ約2m、深さ約0.1mであり、平面形は不定形である。中には東から南西に湾曲する石組みの細い溝がある。溝は長さ約1.3m、内法は幅0.1～0.25mと東部が狭く南西部は広がる。深さは約0.05mである。側石は径0.1～0.25m、厚さ0.1m前後の石を用い、一段積みである。溝が湾曲して囲まれた南側の短径約0.4m、長径約0.8mの楕円形の範囲には径0.1m前後の小礫が密に詰まっている。この遺構は何らかの水利施設と考えられる。

**土坑266** (図版8) 石組遺構267の南西で隣接して検出した土坑である。掘形は短径約1.1m、長径約1.3m、深さ約0.15m、平面形は楕円形である。この土坑は石組遺構267からの水を受けて溜めたものと考えられる。

**溝277** (図版8) 調査区北側で検出した素掘りの溝である。北端は石組溝272の中央に繋がり、北東から南西方向に進み、石組遺構267東側を沿い、その南側で西へ湾曲する。掘形は、長さ約7m、幅0.3～0.5m、掘削下限深度以上のため完掘していない。この溝から水が石組遺構267へ流れ、土坑266を経て溝277へ排水されたと考えられる。

## (6) 第4面 (図版4・14)

第4面は掘削下限深度の面である。調査区北半では遺構はほとんど検出できなかった。検出面は硬くしまり、下層の遺構面か地山と考えられる。調査区中央部から南では焼土が混じる層を検出した。遺構の残存状況は良好と考えられる。遺構は検出したのみで掘削はしていない。そのため遺構などの深さは不明である。検出した主な遺構は溝293、溝294、石組溝298、土坑279である。その他に調査区中央部で建物跡の可能性のある柱穴群を検出した。この面は検出遺構と出土遺物の状況から江戸時代前期から中期、宝永度造営前に相当すると考える。

**石組溝298** (図版14) 調査区中央部で検出した東西方向の溝である。東西の長さ約5m、幅は0.9～1.2mである。検出面では幅0.1m前後、長さ0.2～0.7mの細長い石が東西に2列並び、石組溝であることがわかる。石材は他の石組溝と異なり、主にチャートや砂岩である。

**溝294** (図版14) 調査区中央部から南半で検出した北西から南東方向の溝である。東西の長さは約5m、幅は0.6～0.8mである。

**溝293** (図版14) 調査区南半で検出した溝である。北端は溝294に接し、北東から南西方向に走り、途中で西方向に湾曲する。溝の長さは、北東から南西部分が約4.5m、東西部分が約3m、幅は0.6～1.2mである。北東部には蓋石と考えられる石が3石が接して並ぶ。1石は幅約0.1m、長さ約0.6m、2石は幅0.45～0.6m、長さ0.55～0.6mである。

**土坑279** (図版14) 調査区南東部で検出した石組みを伴う土坑である。検出面では東西約1.3m、南北約1.7mで、平面形は隅丸方形である。土坑の北辺から西辺にかけ、掘形に沿うよう立てられた径0.1～0.3mの石を検出した。

### 註

- 1) 石組溝177の東へ約4.5m延長した位置で2015年8月に文化財保護課の立会調査が実施されたが、石組溝は検出できなかった。

## 4. 遺物

### (1) 遺物の概要

出土遺物は土器・瓦類などが整理箱で33箱出土した。出土遺物には土器類、瓦類、土製品、銭貨、金属製品などがある。出土量は土器類は約75%、瓦類は約12%、金属製品・銭貨は約10%、その他が約3%を占める。

出土遺物の時期は平安時代から江戸時代に及ぶが、江戸時代後半の遺物がほとんどである。江戸時代より以前の遺物は少量・小片であり、後世の遺構に混入して出土したものである。出土した遺物は須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、輸入磁器である。江戸時代の遺物には、土師器、施釉陶器、磁器、染付磁器、土師質土器、平瓦・丸瓦・棧瓦・軒丸瓦・軒平瓦・棟込瓦・棟端瓦などの瓦類、土製品、銭貨、金属製品などがある。それらの中から残存状態の良いもの抽出し、図示した。なお出土土器・瓦類の時期については『平安京左京北辺四坊－第2分冊（公家町）－』に準拠した。<sup>1)</sup>

### (2) 土器類（図17・18、図版15、表4）

土器類は59点を図示し、一覧表を載せた。

**第4面出土土器（図17）** 1は第4面上面から出土した染付磁器椀である。体部外面に草と花（梅か）、高台内に文様か銘（判読不能）がある。時期は江戸時代中期である。

**第3面出土土器（図17）** 2～6は第3面から出土した。

2～5は石組溝272から出土した。2は染付磁器蓋で外面に斜格子文と12葉菊花がある。時期は江戸時代中期である。3は手捏ねの土師器皿である。口径は小さく、体部は肥厚しながらやや内湾して立ち上がり端部はつまむ。4・5は土師器皿である。口径9.3～

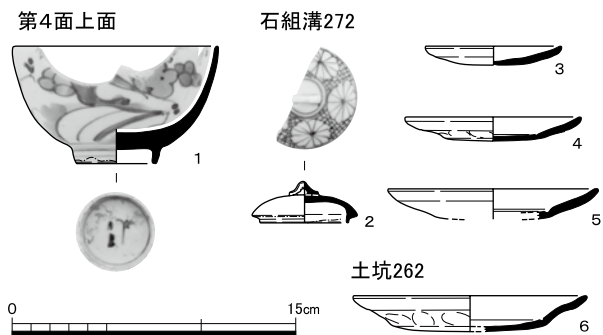


図17 第3・4面出土土器実測図（1：4）

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代～安土桃山時代	須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、輸入磁器				
江戸時代中期～後期	土師器、施釉陶器、磁器、染付磁器、土師質土器、軒瓦、瓦、土製品、銭貨、金属製品		土師器50点、施釉陶器4点、染付磁器5点、棟込瓦5点、棧瓦1点、飾り瓦1点、棟端瓦1点、土製品2点、銭貨5点、金属製品3点		
合計		40箱	77点（7箱）	0箱	33箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より7箱多くなっている。

11.1cmであり、体部は内面の圏線から外へ開き、口縁部はわずかに内湾する。3～5の時期はⅢ期中段階～新段階に属する。

6は土坑262から出土した土師器皿である。口径は12.2cmであり体部は内面の圏線から外に開いて立ち上がり、口縁部はわずかに内湾する。時期はⅢ期中段階～新段階に属する。

**第2面出土土器**（図18、図版15） 7～59は第2面から出土した。

7は建物1の柱穴24、8は建物11の柱穴189から出土した土師器皿である。時期はⅢ期新段階～Ⅳ期古段階に属する。口径は11.2cm、12.0cmであり、体部は内面の圏線から外に開いてやや肥厚し、口縁部はわずかに内湾する。

9～11は土坑194から出土した土師器皿である。時期はⅢ期新段階～Ⅳ期古段階に属する。口径は11.1～13.5cm、体部は内面の圏線から外に開き、端部は丸く収まる。11の内外面に薄く煤が付着する。

12～23は土器溜93から出土した土器である。12・13は染付磁器椀である。時期は江戸時代中期である。12の外表面は草花である。13の外表面は草、高台内には銘款「渦福」がある。14～23は土師器皿である。時期はⅢ期新段階～Ⅳ期古段階に属する。口径は11.3～12.3cm、体部は内面の圏線から外に開き、口縁部は少し肥厚し、端部は丸く収まる。14・17の口縁部には煤が付着する。

24～33は土器溜215から出土した土師器皿である。時期はⅢ期新段階～Ⅳ期古段階に属する。口径は10.7～12.3cmである。体部は内面の圏線から外に開き、口縁部は少し肥厚し、端部は丸く収まる。

34～45は土坑82から出土した土師器蓋・皿である。時期はⅢ期新段階～Ⅳ期古段階に属する。34～37は土師器蓋である。口径は11.8～14.2cm、体部は内面の圏線から下方に開き、肥厚して端部は丸く収まる。外面は丁寧に調整を行い、天井部には35を除き、ツマミの痕跡がある。胎土は密で土師器皿より白みがある。38～45は土師器皿である。口径は9.5～11.5cm、体部は内面の圏線から外に開き、少し内湾して端部はつまみ上げる。39の口縁端部には煤が付着する。

46～48は石組溝177から出土した土師器蓋・皿である。時期はⅢ期新段階～Ⅳ期古段階に属する。46・47は土師器蓋である。口径は11.4～12.0cm、体部は内面の圏線から下方に開き、口縁部は肥厚して端部は丸く収まる。外面は丁寧に調整を行い、胎土は密である。46は天井部にツマミの痕跡がある。48は土師器皿である。口径9.6cm、体部は圏線から外に開き、口縁部は少し内湾して端部はつまみ上げる。

49は調査区北西部の柱穴186から出土した施釉陶器尿甕である。時期は江戸時代後期と考えられる。横（胴最大長）は20.5cm、器高14.2cmである。この形は、輪積みで壺形に成形し、横にした状態で窪ませて底部を作り、口縁と取手を付けたと考えられる。内外面に施釉し、成形時の底部外面は露胎である。

50～52はカマド37から出土した土器である。50・51は施釉陶器壺である。時期は江戸時代後期である。器高は17.0cm・19.0cm、胴部最大径は18.6cm・19.3cmである。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部はわずかに内湾して立ち上がり、端部の断面形は逆台形状である。信楽産であろう。52は土

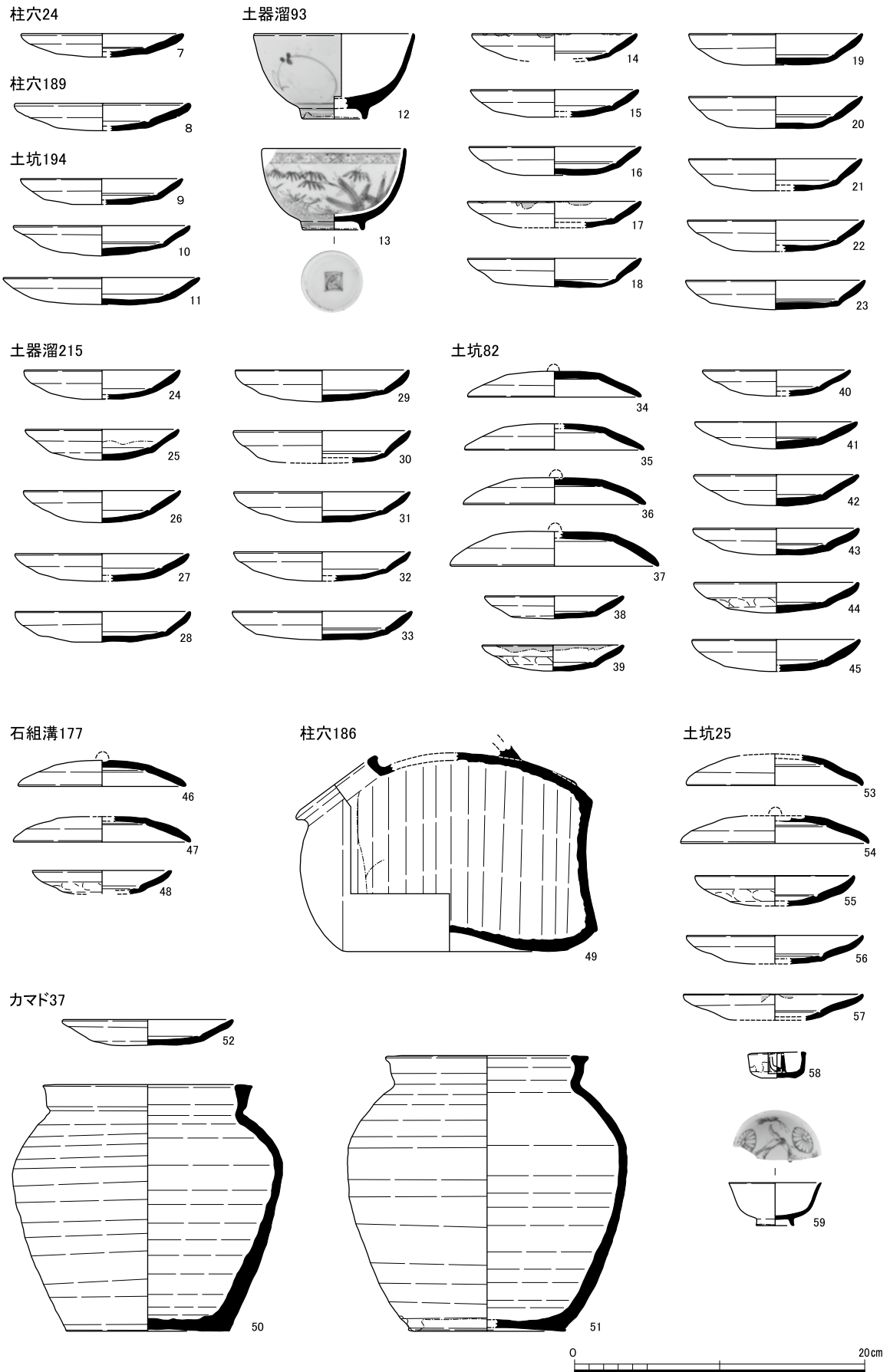


図18 第2面出土土器実測図 (1 : 4)

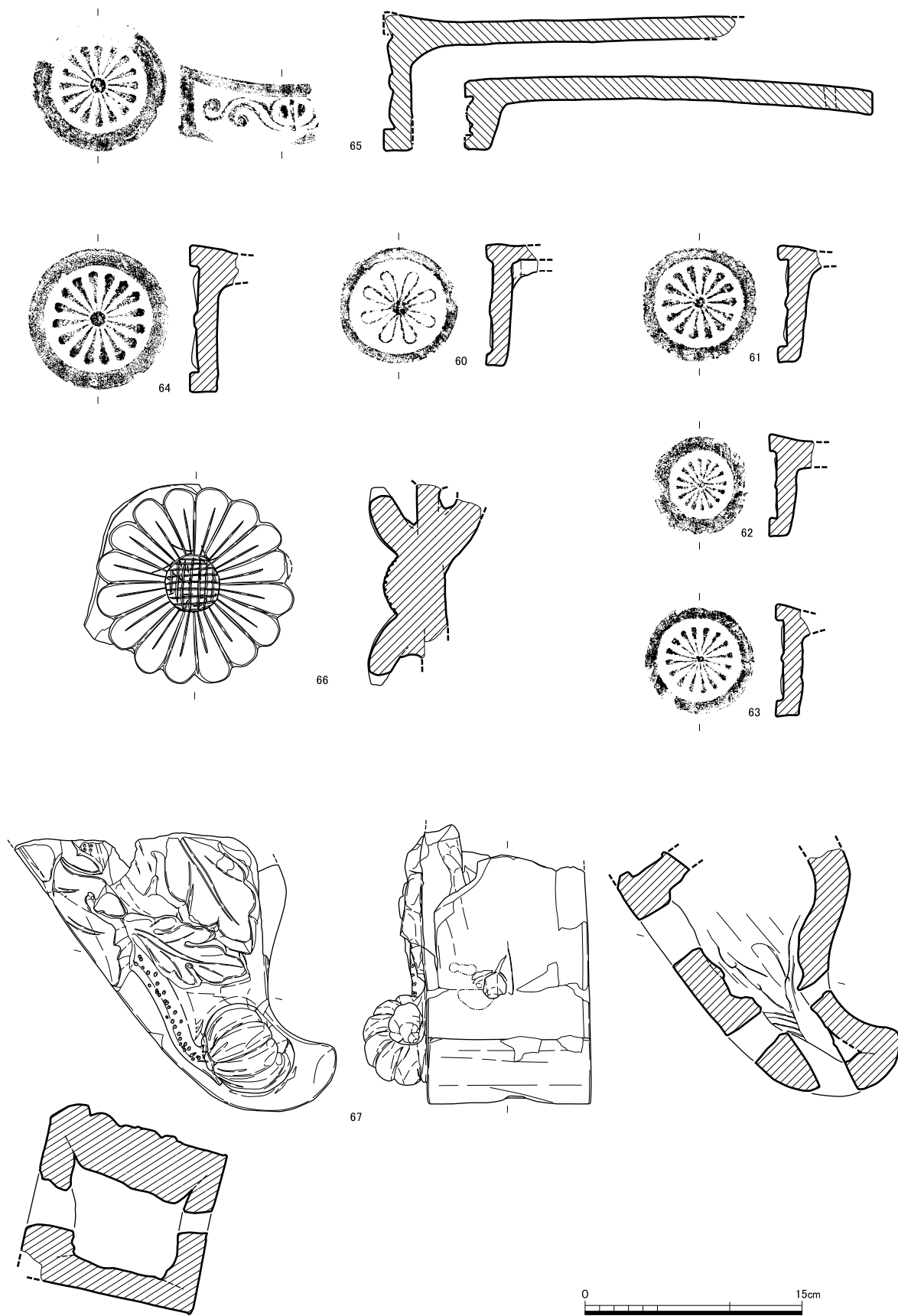


图19 瓦拓影·实测图 (1 : 4)



師器皿である。時期はⅢ期新段階～Ⅳ期古段階に属する。口径11.7cm、体部は内面の圏線から外に開き、口縁部は少し内湾し、端部は丸く収まる。

53～59は土坑25から出土した土器である。うち53～57は土師器蓋・皿である。時期はⅢ期新段階～Ⅳ期古段階に属する。53・54は土師器蓋であり、口径は12.0cm、12.9cm、体部は内面の圏線から下方に開き、口縁部は少し内湾して端部はつまむ。54は天井部にツマミの痕跡がある。55～57は土師器皿である。口径は10.9～12.3cm、体部は内面の圏線から外に開き、口縁部は内湾し端部はつまみあげる。57の口縁端部には煤付着する。58は施釉陶器灯明具である。時期は江戸時代後期である。口径3.5cm、中に半身で径1.1cmの灯心受けがある。体部は直立に立ち上がり、口縁端部は少し広がり、断面は逆台形状である。内外面は施釉し、底部から体部にかけ露胎である。59は染付磁器杯である。時期は江戸時代末期から近代である。口径6.4cm、体部は外に開き、口縁部は少し外傾して端部はつまむ。体部内面には16葉菊花文と松、見込には鶴が描かれる。

### (3) 瓦類 (図19、図版16)

瓦類は8点を図示した。

60～64は棟込瓦の小型菊花文軒丸瓦である。60・61は第1面柱穴85から出土した。うち60は8葉菊花文瓦である。瓦当面径は8.1～8.3cm、弁は輪郭線で表現し、径1cm前後の中房がある。61は14葉菊花文瓦である。瓦当面径は8.0～8.4cm、弁は凸、中房径は0.9cm前後である。表面は雲母が目立つ。62・63は第2面溝180から出土した16葉菊花文瓦である。62の瓦当面径は6.8～7.0cm、弁は平坦な凸で小さく、中房径は0.5cm前後である。63は瓦当面径は7.7～7.9cm、弁は凸で小さく、中房径は0.5cm前後である。64は石組溝177から出土した16葉菊花文瓦である。瓦当面径は10cm前後、弁は凸、中房径は1cm前後である。表面は雲母が目立つ。棟込瓦の時期は60は江戸時代中期、その他は江戸時代後期である。

65は第1面土坑52から出土した棧瓦の軒瓦である。全長は軒平部28.1cm、軒丸部では30.0cmである。軒平部は唐草文で中心飾りは蕾様のものである。軒丸部は16葉菊花文である。表面にはヘラミガキを施す。時期は江戸時代後期である。

66は石列125(堀5)から出土した飾り瓦である。菊花が付き、その径は13.8cm前後、高さ3.4cmである。裏には把手が付く。表はヘラミガキを施し、燻しが残る。67は建物4内の土坑131から出土した棟端瓦の右下鱗瓦である。残存長は19.3cm、厚さが15.8cmである。菊花の蕾と葉が彫られる。表面は全体がにぶい赤褐色であり、火を受けた跡であろう。66・67の時期は江戸時代後期である。

### (4) 土製品 (図20)

土製品は泥面子2点を図示した。68は土坑82から出土した。十二支の「亥」が彫られる。69は建物11の柱穴189から出土した。「エ」の字が彫られる。時期は江戸時代。

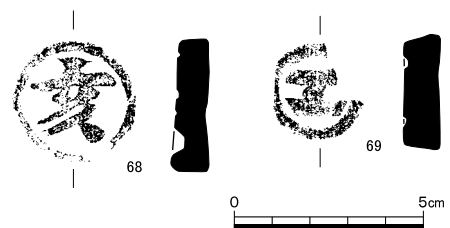


図20 土製品拓影・実測図 (1:2)

(5) 銭貨 (図21、図版16、表5)

銭貨は5点出土した。全て寛永通寶であり、いわゆる「新寛永」である。

70は裏面に「文」があり、江戸時代前期<sup>2)</sup>に鑄造されたものである。

71～74は江戸時代中期に鑄造されたものである。

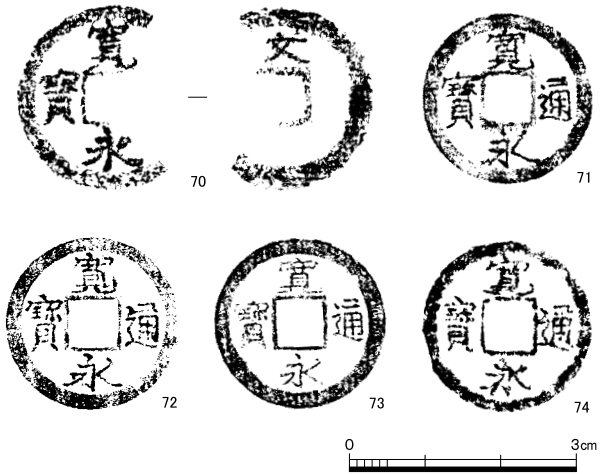


図21 銭貨拓影 (1:1)

(6) 金属製品 (図22、図版16、表6)

金属製品は3点図示した。

75は土坑275から出土した匙である。鍛造であり、材質は銅であろう。

76は土器溜93から出土した飾り金具である。金銅製であり、部分的に金メッキが残る。表は16葉菊花文であるが、ズレがあり15葉に見える。

77は土器溜93から出土した煙管の吸口である。鍛造で板を筒にした継目がある。材質は真鍮か。

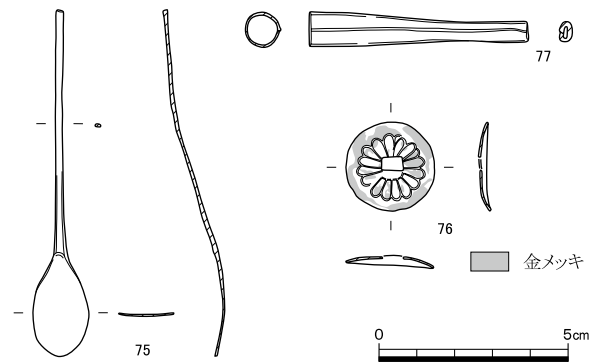


図22 金属製品実測図 (1:2)

註

1) 「第11章 まとめ」『平安京左京北辺四坊－第2分冊 (公家町)－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年

染付磁器の時期は、能芝 勉「まとめ4節 出土陶磁器の様相」、土師器皿の時期は、小松武彦「まとめ3節 近世の土師器皿」、瓦類の時期は、内田好昭「まとめ6節 公家町の瓦」に準拠した。

2) 「寛永通寶」の時期については、永井久美男編『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会 1996年を参考にした。

表4 土器一覧表

遺物番号	種 類	口径cm	器高cm (復元)	残存割合	出 土 遺 構	備 考
1	染付磁器椀	10.9	4.2	ほぼ完形	第4面上面	
2	染付磁器蓋	5.6	2.2	5/10	第3面石組溝272	
3	土師器皿	7.2	1.0	3/10	第3面石組溝272	
4	土師器皿	9.3	1.3	5/10	第3面石組溝272	
5	土師器皿	11.1	(1.6)	2/10	第3面石組溝272	
6	土師器皿	12.2	1.9	4/10	第3面土坑262	
7	土師器皿	11.2	1.6	2/10	第2面柱穴24	
8	土師器皿	12.0	1.9	3/10	第2面柱穴189	
9	土師器皿	11.1	1.8	4/10	第2面土坑194	
10	土師器皿	12.1	1.8	8/10	第2面土坑194	
11	土師器皿	13.5	1.9	6/10	第2面土坑194	内外面に煤
12	染付磁器椀	11.0	5.9	4/10	第2面土器溜93	底部径4.3cm
13	染付磁器椀	10.0	5.7	5/10	第2面土器溜93	底部径4.3cm、高台内に銘款「渦福」
14	土師器皿	11.3	(1.6)	4/10	第2面土器溜93	口縁部に煤
15	土師器皿	11.5	1.9	2/10	第2面土器溜93	
16	土師器皿	11.7	2.0	4/10	第2面土器溜93	
17	土師器皿	11.9	1.8	2/10	第2面土器溜93	口縁部に煤
18	土師器皿	11.9	2.0	8/10	第2面土器溜93	
19	土師器皿	11.9	2.2	6/10	第2面土器溜93	
20	土師器皿	11.9	2.2	6/10	第2面土器溜93	
21	土師器皿	11.9	2.2	4/10	第2面土器溜93	
22	土師器皿	12.1	2.2	4/10	第2面土器溜93	
23	土師器皿	12.3	2.0	5/10	第2面土器溜93	
24	土師器皿	10.7	2.0	2/10	第2面土器溜215	
25	土師器皿	10.5	2.1	4/10	第2面土器溜215	
26	土師器皿	10.7	2.2	2/10	第2面土器溜215	
27	土師器皿	11.9	1.9	2/10	第2面土器溜215	
28	土師器皿	11.9	2.1	4/10	第2面土器溜215	
29	土師器皿	11.9	2.2	8/10	第2面土器溜215	
30	土師器皿	12.1	(2.2)	2/10	第2面土器溜215	
31	土師器皿	12.1	2.1	6/10	第2面土器溜215	
32	土師器皿	12.1	2.0	2/10	第2面土器溜215	
33	土師器皿	12.3	2.0	6/10	第2面土器溜215	
34	土師器蓋	11.8	1.8	ほぼ完形	第2面土坑82	
35	土師器蓋	12.2	1.8	4/10	第2面土坑82	
36	土師器蓋	12.6	(1.9)	4/10	第2面土坑82	
37	土師器蓋	14.2	2.4	4/10	第2面土坑82	
38	土師器皿	9.5	1.6	6/10	第2面土坑82	
39	土師器皿	9.6	1.8	ほぼ完形	第2面土坑82	口縁部に煤
40	土師器皿	10.1	1.8	4/10	第2面土坑82	
41	土師器皿	11.2	1.9	3/10	第2面土坑82	
42	土師器皿	11.2	2.2	6/10	第2面土坑82	
43	土師器皿	11.3	1.9	ほぼ完形	第2面土坑82	
44	土師器皿	11.3	2.1	4/10	第2面土坑82	
45	土師器皿	11.5	2.2	4/10	第2面土坑82	
46	土師器蓋	11.4	1.8	2/10	第2面石組溝177	
47	土師器蓋	12.0	1.8	3/10	第2面石組溝177	
48	土師器皿	9.6	(1.6)	3/10	第2面石組溝177	
49	施釉陶器尿瓶	7.0	(14.2)	8/10	第2面柱穴186	胴部最大径20.5cm
50	施釉陶器壺	12.6	17.0	8/10	第2面カマド37西	胴部最大径18.6cm
51	施釉陶器壺	12.0	19.0	6/10	第2面カマド37東	胴部最大径19.3cm
52	土師器皿	11.7	1.8	5/10	第2面カマド37	
53	土師器蓋	12.0	(2.1)	4/10	第2面土坑25	
54	土師器蓋	12.9	1.9	4/10	第2面土坑25	
55	土師器皿	10.9	2.1	2/10	第2面土坑25	
56	土師器皿	12.1	2.0	4/10	第2面土坑25	
57	土師器皿	12.3	(1.8)	2/10	第2面土坑25	口縁に煤
58	施釉陶器灯明具	3.5	1.8	ほぼ完形	第2面土坑25	底部径2.3cm たんころ
59	染付磁器杯	6.4	3.0	4/10	第2面土坑25	底部径2.7cm

表5 錢貨一覧表

遺物番号	種 類	径cm	重さ g	残存割合	出 土 遺 構	備 考
70	寛永通寶	2.5	1.56	7/10	第3面上面	裏面に「文」
71	寛永通寶	2.3	3.33	完形	第2面上面	
72	寛永通寶	2.3	2.48	完形	第3面上面	
73	寛永通寶	2.3	2.60	完形	第2面石組溝272	
74	寛永通寶	2.3	3.03	完形	第3面上面	

表6 金属製品一覧表

遺物番号	種 類	長さcm	径cm	幅cm	厚さcm	重さ g	出 土 遺 構	備 考
75	匙	9.2	—	柄:0.2 皿:1.5	0.1	2.53	第3面土坑275	
76	飾り金具	—	2.35~2.4	高さ0.2	0.05	1.80	第2面土器溜93	金メッキ残る
77	煙管(吸口)	5.8	口元:0.35 羅字側:0.95	—	口元:0.05 羅字側:0.15	3.30	第2面土器溜93	

## 5. まとめ

今回の調査では、江戸時代前期から近代の遺構を4面にわたって検出した。これらについて述べる。

**第4面の遺構** 第4面は遺構を掘削していないため遺構の詳細な時期は不明であるが、検出遺構と出土遺物の状況から江戸時代前期から中期の遺構群と考えられる。宝永度造営(1709年)前の遺構と考えられ、御所の敷地が拡幅される前にあたる。江戸時代前期には調査地一帯に本院御所(明正院)があった。検出した石組溝298、溝293・294などはこれに関連する遺構である可能性がある。

**第3面の遺構** 第3面の時期は江戸時代中期と考えられる。建物は復元できなかったが、石組溝272、溝277と石組遺構267などを検出した。御所は宝永度造営時に敷地が広く北と東に拡幅されたが、その敷地の北限は現皇后門よりやや南側・調査区北壁近辺である<sup>1)</sup>。石組溝272は北限に近く、その内溝の可能性はある。石組溝272につながる溝277と石組遺構267は遣水などの水利施設の可能性はある。

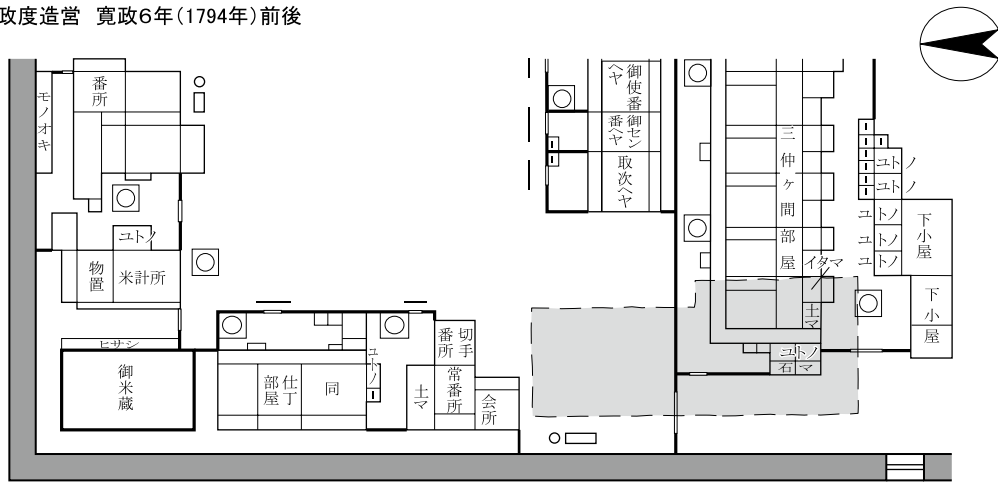
**第2面の遺構** 江戸時代後期の遺構群である。この面では多くの建物跡や石組溝などを検出した。調査区北西部では建物1・2と堀3を検出した。調査区中央部では建物4、堀5、東西溝180を検出した。溝180は改修跡がある。調査区東側では路面と門8、柱列12を検出した。路面は門8の前後と柱列12の床下部分にも検出した。調査区南半では堀6・7、建物9・10・11を検出した。調査区南側では底面を漆喰で固めた石組溝177を検出した。

江戸時代後期の御所北西部を記した絵図としては、寛政度造営<sup>2)</sup>と文化度造営<sup>3)</sup>及び安政度造営<sup>4)</sup>のものがある(図23)。これらの絵図を比較・検討すると、文化度造営と安政度造営は建物配置がほぼ一致するが、先行する寛政度造営とは建物配置の異なる部分がある。全ての絵図において「三仲間(みなかま)」(寛政度造営では三仲ヶ部屋)とそれを囲む堀の配置は共通する。寛政度造営から文化・安政度造営への変化は、「御門(現皇后門)」と「番所」、調査区に位置する主な建物では「会所」・「切手番所」・「常番所」・「輿へや」・「町人溜」などが増築され、「番所」は安政度造営でも増築される。

これら絵図と検出した遺構群を比較・検討すると、文化・安政度造営の建物配置と検出した建物跡の配置がほぼ一致する。建物1・2は「町人溜り」、堀3がそれを囲む北東から南西の堀、建物4と堀5は「会所」と「三仲間」を囲む東西の堀、堀6・7は「三仲間」を囲む南北の堀と「ツイタテ」、門8は東西堀の西側にある門、建物9は「三仲間」、建物11は「湯殿」、柱列12は「輿部屋」であろう。建物10は記名がないが便所の可能性がある。さらに寛政度造営の絵図と比較すれば、「三仲間部屋」(建物9)とそれを囲む堀は東半分が一致する。

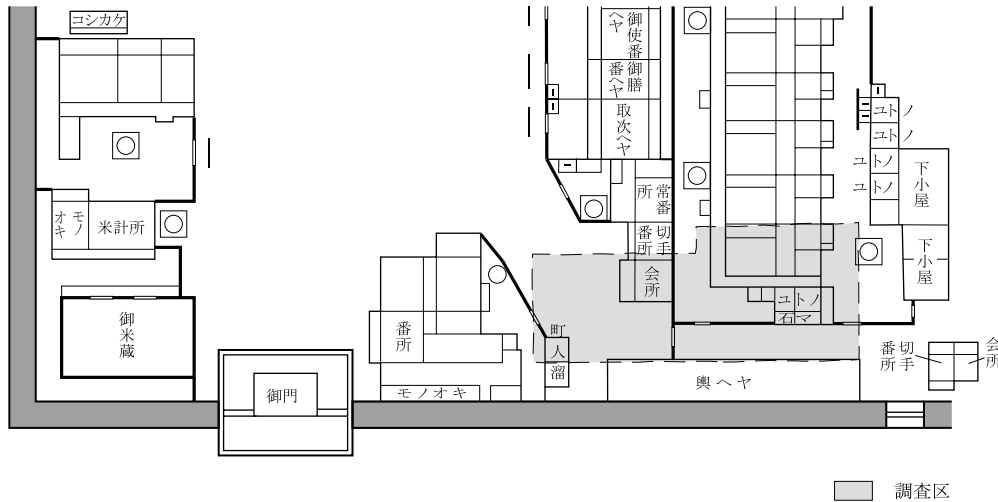
検出した建物跡の配置を考えると、建物9(三仲間部屋)とそれを囲う堀は、寛政度造営から安政度造営までそのままの位置にあり、検出した建物跡の配置と一致する。その他の部分では文化度造営で調査区外北西の「御門」が新設され、その時に御所北西部の寛政度造営建物(会所、常番所

1 寛政度造営 寛政6年(1794年)前後

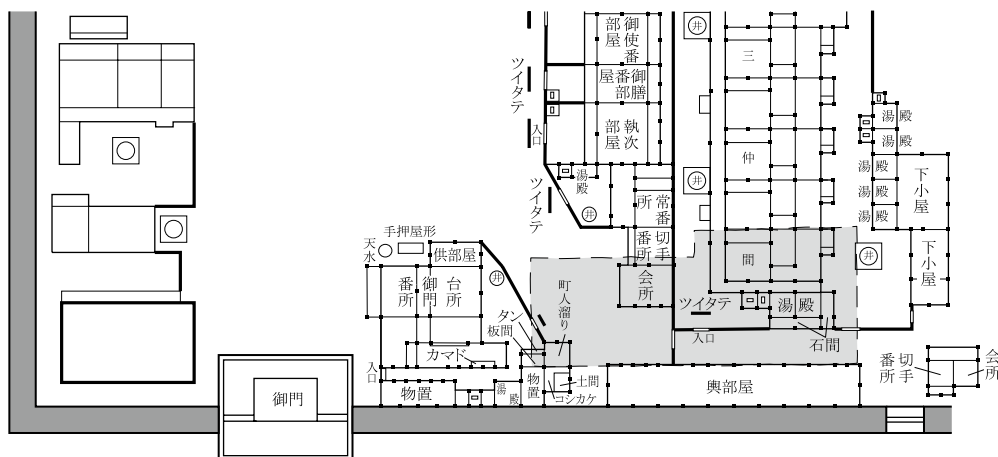


※「三仲ヶ間」は朝廷内の女官、御末・女孺・御服所の総称

2 文化度造営 文化14年(1817年)前後



3 安政度造営 安政2年(1855年)



※「三仲間」は「三ヶ仲間」に同じ。

上の図は以下の絵図を元に作図し、調整・加筆した

- 1 『大工頭中井家建築指図集一中井家所蔵本一』 思文閣出版 2003年 図214 「皇后御殿絵図」(寛政度)より
- 2 同上 図215 「女御御殿一分半計図」(寛政度)より
- 3 宮内庁京都事務所提供資料

図23 造営絵図

など)を壊し、建物1・2(町人溜)と塀3が新築・増設されたと考えられる。調査区中央部の建物4(会所)は塀5の北側に増築され、その南壁はおそらく塀と共用したと思われる。調査区東側の「輿へや」は路面の上に増築され、路面と門幅は狭くなる。門と塀に隣接する溝180は改修跡を検出したが、その時期は御所全体が大規模に造営された安政度造営の時期と考えられる。調査区南側で検出した石組溝177は、底面が漆喰層のみである。おそらく溝180改修の時期と同時期、安政度造営の時に作られたと思われる。

第2面調査では、明瞭な焼土層は検出できず、遺構にも焼土は多く含まれていなかった。このことから、調査地近辺は火災による被害は少なかったと考えられる。また寛政度造営と一致する建物配置と、文化度造営で増築された建物跡や改修の跡がみられ、文化度造営と安政度造営はほぼ同じ建物配置であることなどから、安政度造営はそれ以前の建物を踏襲し、増築あるいは改築したと考えられる。第2面は寛政度造営から安政度造営以降、江戸時代末期までの遺構面であろう。

**第1面の遺構** この面では現代の建物やインフラ設置による攪乱と共に瓦を廃棄した土坑を多く検出した。明治維新後の建物撤去時のものであろう。この面は江戸時代末期から近代の遺構が混在している遺構面である。

以上、今回の調査では掘削深度の制限から、調査も制限を受けたが、江戸時代から近代までの御所の変遷を窺うことができる遺構を確認できた成果は大きい。

註

- 1) 小松武彦『平安京左京北辺四坊一町跡・公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-12 2014年「まとめ」の調査成果より
- 2) 『大工頭中井家建築指図集-中井家所蔵本-』思文閣出版 2003年 図214
- 3) 同上 図215
- 4) 宮内庁京都事務所提供資料





# 圖 版

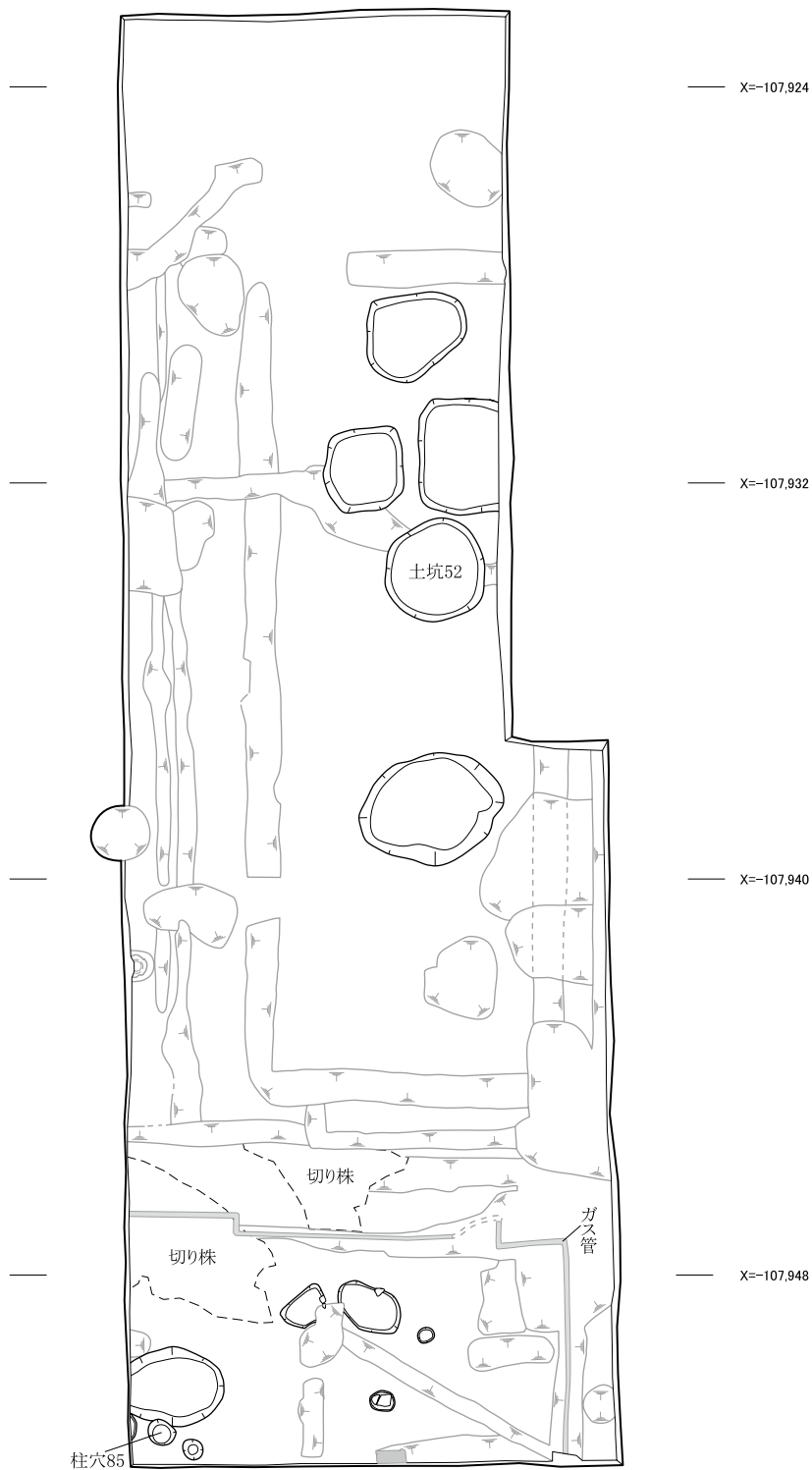




Y=-21,804

Y=-21,800

Y=-21,796



柱穴85

切り株

切り株

ガス管



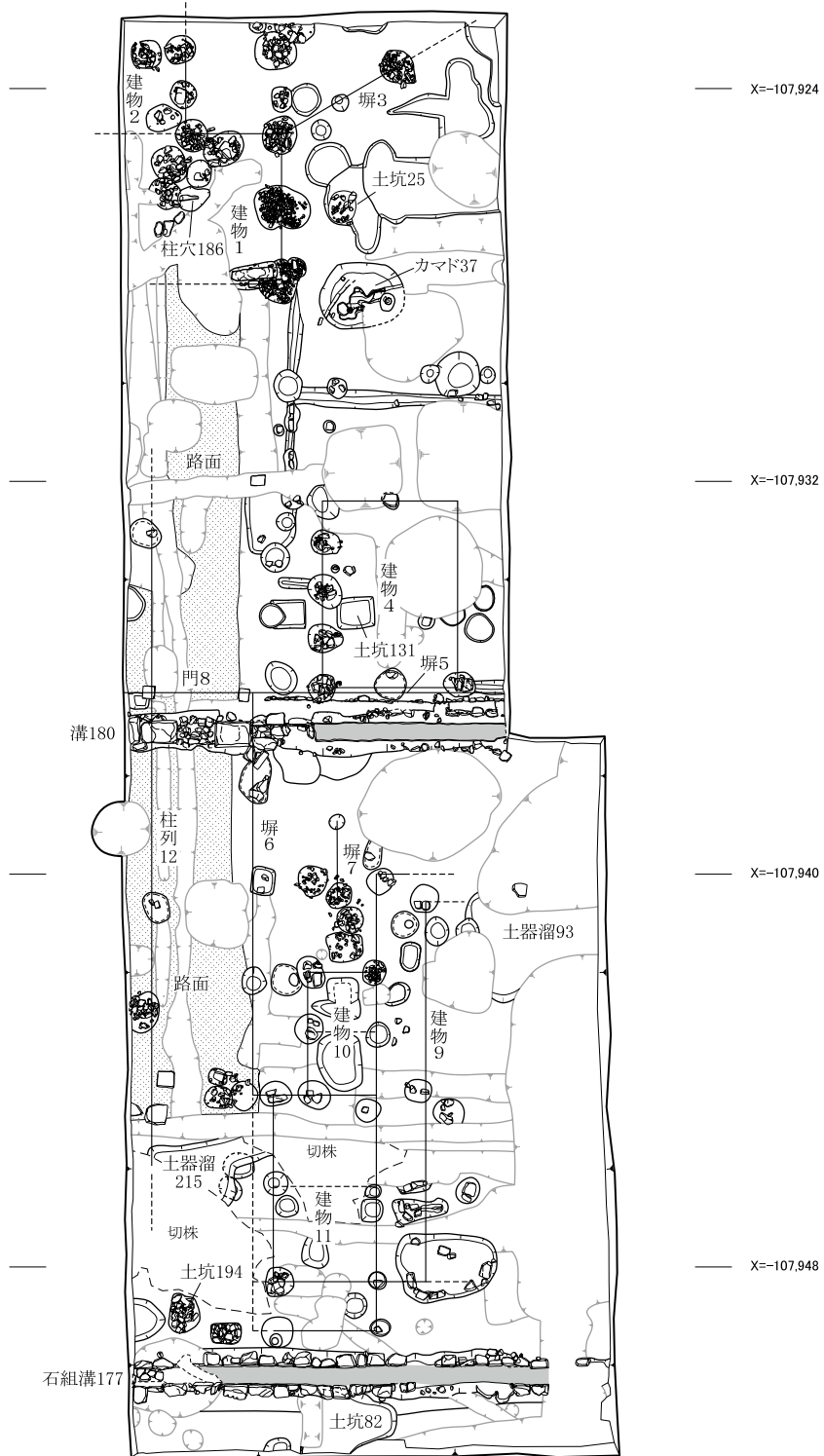
第1面遺構平面図 (1 : 150)



Y=-21,804

Y=-21,800

Y=-21,796



X=-107,924

X=-107,932

X=-107,940

X=-107,948

路面



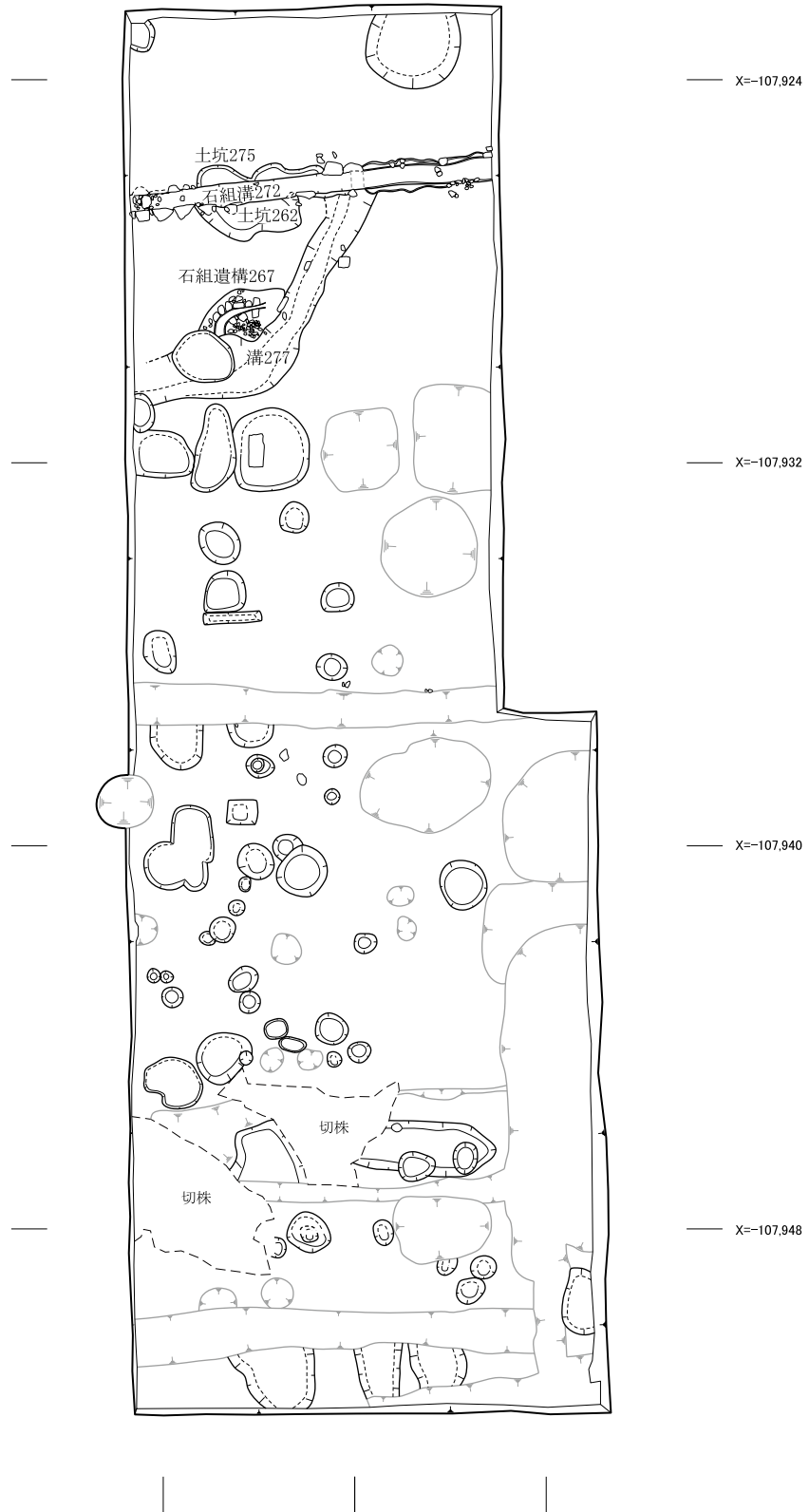
第2面遺構平面図 (1 : 150)



Y=-21,804

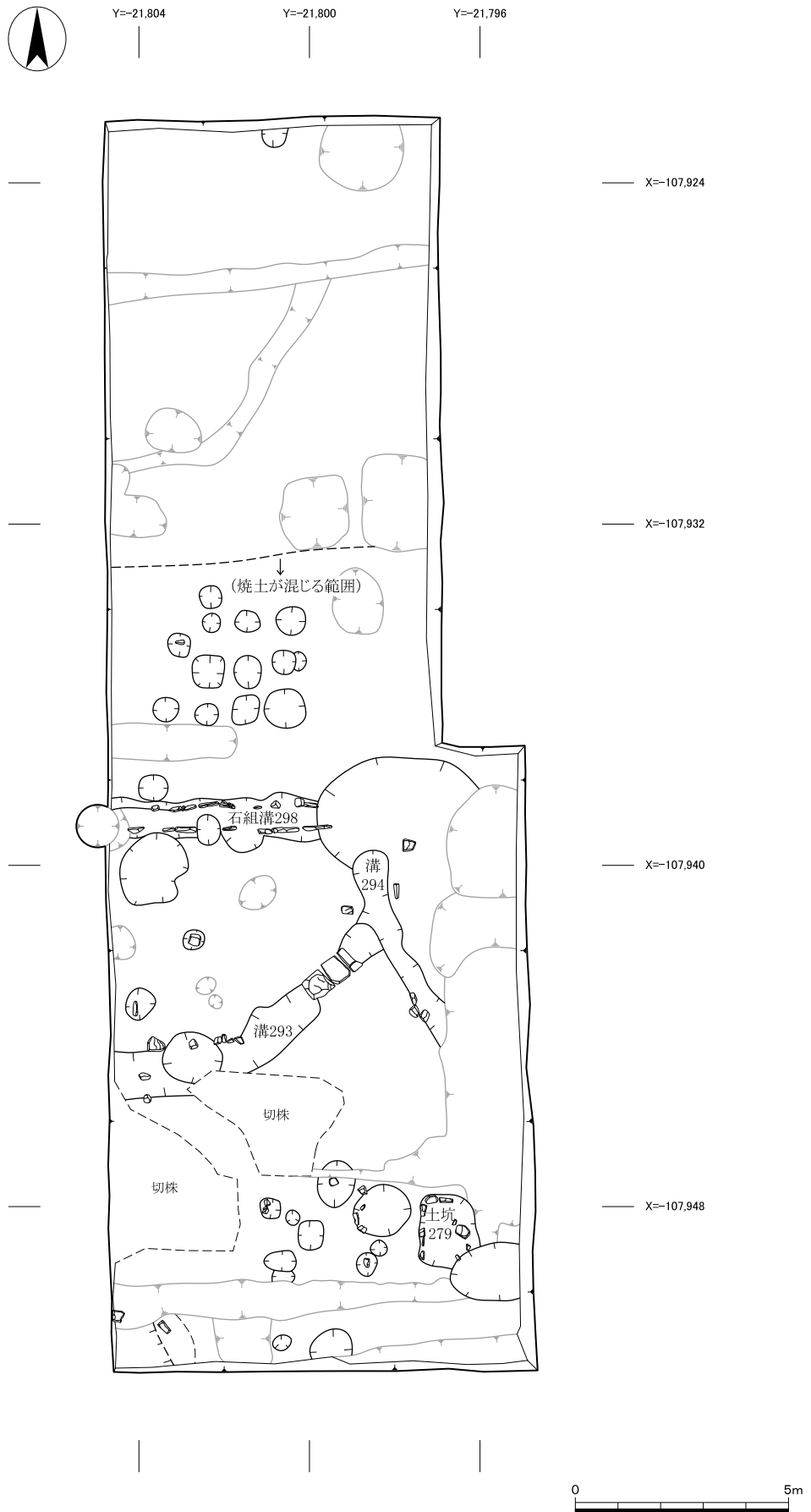
Y=-21,800

Y=-21,796

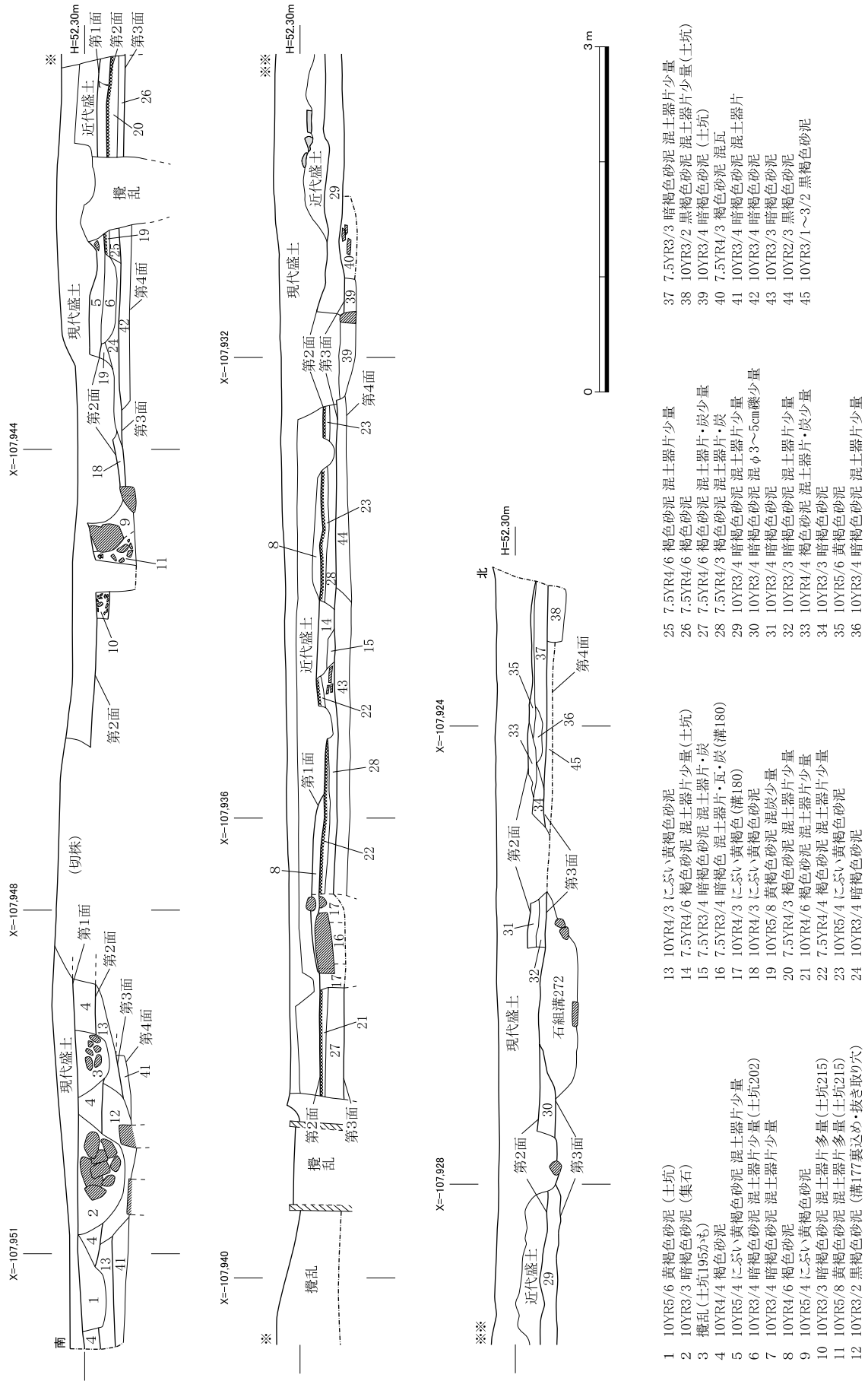


0 5m

第3面遺構平面図 (1 : 150)

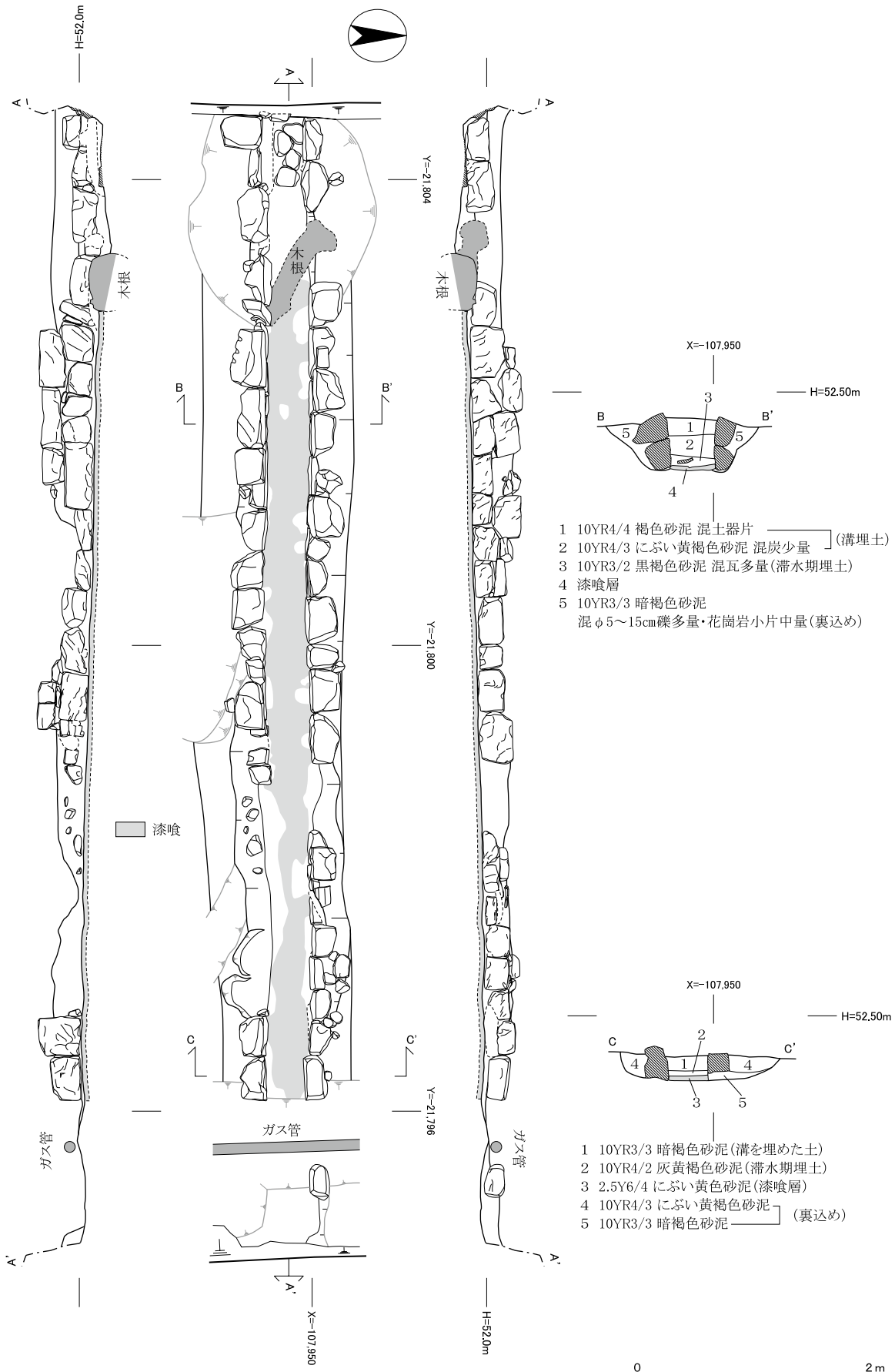


第4面遺構平面図 (1 : 150)



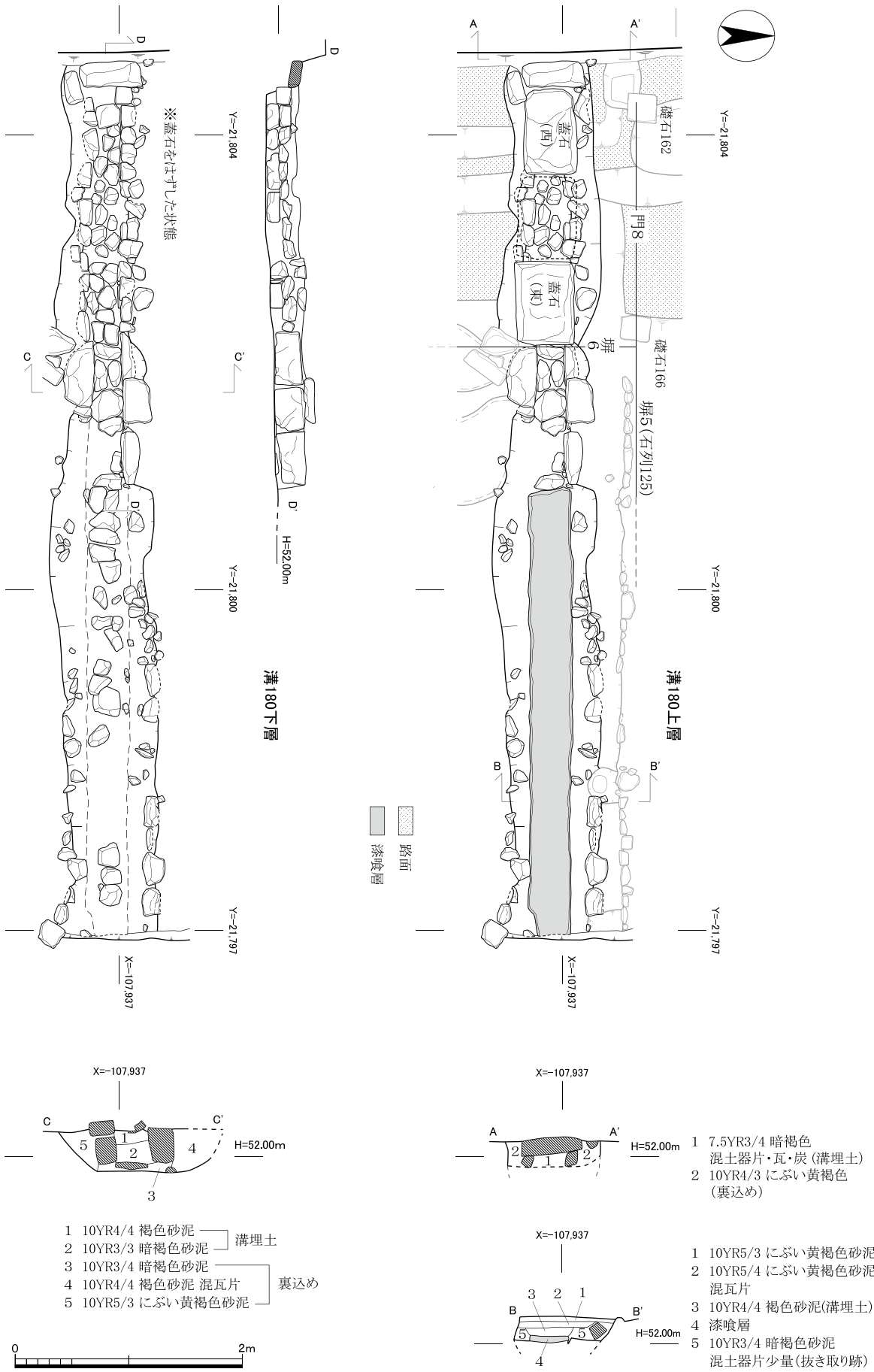
調査区西壁断面図 (1 : 50)

図版6 遺構



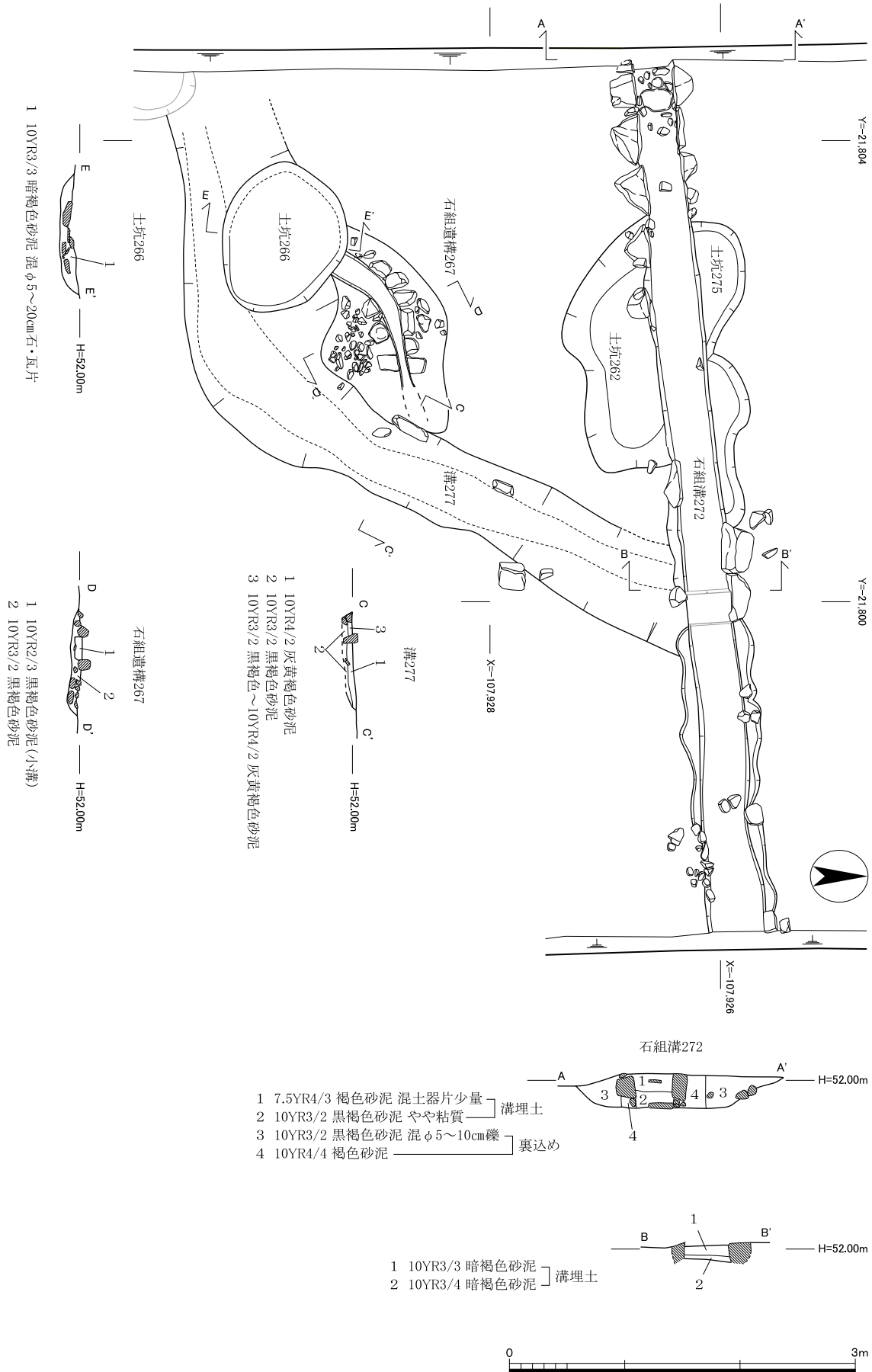
石組溝177実測図 (1 : 50)





溝180実測図(1:50)

図版 8 遺構



石組溝272・土坑266・石組遺構267・溝277実測図(1:50)



1 第1面全景（北から）



2 第2面全景（北東から）



1 建物1・2（北東から）



2 建物4・溝180（北から）



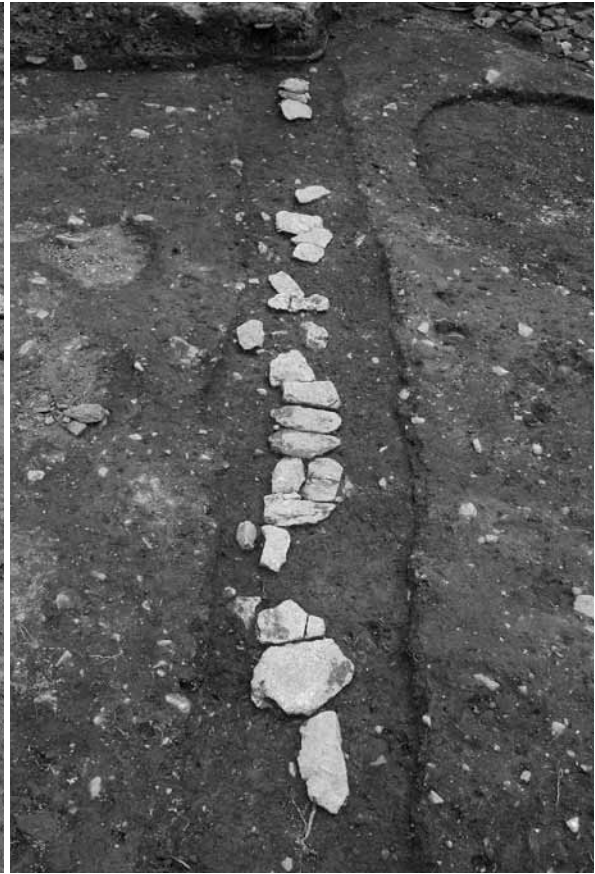
1 堀6・建物9～11（北から）



2 門8・溝180西部・路面（北から）



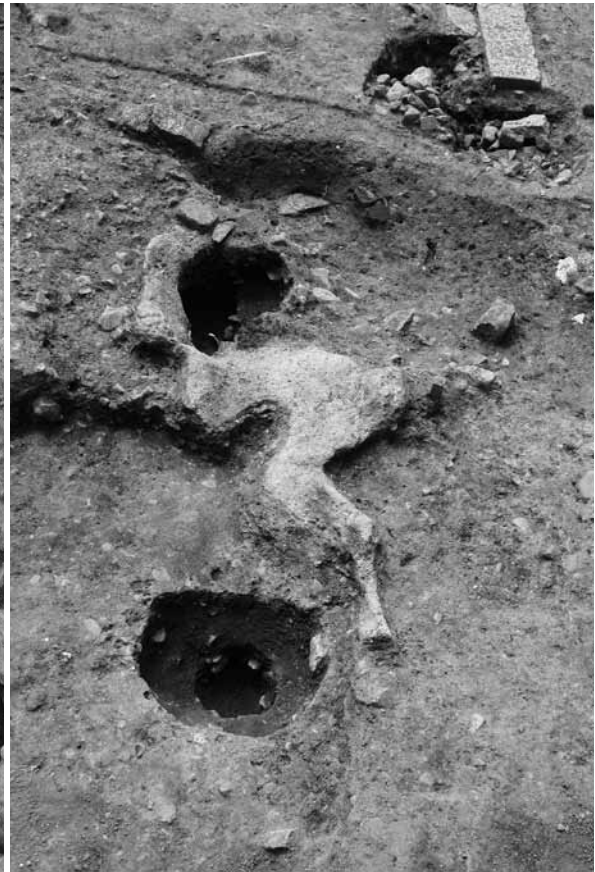
1 溝180 (西から)



2 溝180下層 (西から)



3 石組溝177 (西から)



4 カマド37 (東から)



1 第3面全景（北東から）



2 石組遺構267（東から）



3 石組溝272（東から）



1 第4面全景（北から）



2 石組溝298（東から）



3 溝293・294（北東から）



4 調査区南部、土坑279（東から）







瓦類・土製品・錢貨・金屬製品

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	くげまちいせき							
書名	公家町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2015-8							
編著者名	布川豊治							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2015年12月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くげまちいせき 公家町遺跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 きょうとぎょえん 京都御苑3番	26100	241	35度 01分 37秒	135度 45分 40秒	2015年7月 1日～2015 年8月28日	257㎡	倉庫建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
公家町遺跡	邸宅跡	江戸時代前期 ～中期	石組溝、溝、土坑			御所の造営の変遷 に合致する遺構群 を検出した。建物 跡群は寛政度造営、 文化度造営、安政 度造営の変化を確 認できた。		
		江戸時代中期	石組遺構、石組溝、 溝、土坑	染付磁器、棟込瓦、銭 貨、金属製品				
		江戸時代後期 ～末期	建物、塀、門、柱 列、石組溝、溝、 カマド、土器溜、 土坑	土師器、施釉陶器、染 付磁器、瓦類、金属製 品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-8

## 公家町遺跡

発行日 2015年12月25日

編集  
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961